

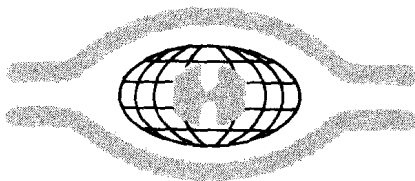
HEIBON
SHA'S
WORLD
ENCYCLO
PEDIA

世界 大百科 事典

10

コーコオ

平凡社



世界大百科事典 10

1981年4月20日 初版発行
1982年印刷
全36巻揃現金定価 145,000円

編集兼発行人 下中邦彦
発行所 平凡社
郵便番号102
東京都千代田区三番町5
振替東京8-29639番
電話 03(265)0451番

本文用紙 十条製紙株式会社
グラビア用紙 山陽国策パルプ株式会社
多色オフ
見返用紙 日清紡績株式会社

本文写植製版 フォト印刷株式会社
本文印刷 株式会社東京印書館
グラビア製版印刷 株式会社東京印書館
多色オフ 株式会社光村原色版印刷所

クロース ダイニック株式会社
表紙箔押 斎藤商会
製本 和田製本工業株式会社

凡 例

●見出しのつけ方●

〈表音見出し〉

1. 日本読みのものは〈現代かなづかい〉による〈ひらがな〉書きとし、促音・拗音は小字とした。ただし、お列長音は〈う〉、〈ち・づ〉は〈じ・ず〉とした。
2. 外国読みのものは、外来語を含めて〈カタカナ〉書きとし、長音は〈音びき〉(一)を用いた。略語は、とくに原語読みの普及しているもののほかは英語読みに従った。
3. 中国・朝鮮などの人名・地名は、慣用の漢字読みで出したが、現地読みに近い慣用読みのあるものはそれによった。
4. 日本語と外来語との合成語は、日本語の部分は〈ひらがな〉、その他は〈カタカナ〉とした。

〈本見出し〉

1. 日本読みのものは、〈漢字〉と〈ひらがな〉を用いた。〈ひらがな〉書きのもので、表音見出しとまったく一致するものは省略した。
2. 外国読みの項目には、原則として原語(あるいは語原を示す語)を入れた。ただし、ギリシア語、ロシア語その他、特殊な文字のものはローマ字におきかえて入れた。
3. 日本読みと外国読みとの合成したものは、〈漢字〉〈ひらがな〉〈カタカナ〉をあわせ用いた。

〈項目配列の方法〉

1. 表音見出しの五十音順とし、促音・拗音も音順にかぞえ、清音、濁音、半濁音の順序とした。
2. 〈音びき〉(一)のあるものは〈音びき〉のないものの後にした。
3. 同音のものは、おおよそつぎのような順序で配列した。
 - a. 表音見出しの〈カタカナ〉→〈ひらがな〉。
 - b. 本見出しのないもの→〈カタカナ〉のもの→〈ひらがな〉のもの→漢字のもの。
 - c. 本見出しが漢字のものは、第1字目の画数の少ないものを先にし、第1字目が同字のものは順次第2字以降の画数による。
 - d. 同音同字のものでは、普通名詞→固有名詞。
 - e. 外国人名では、ファミリー・ネーム(同一の場合はパーソナル・ネーム)のアルファベット順。
 - f. 日本地名では、自然地名→行政地名→その他の地名。

●文体と用語・用字●

1. 漢字まじり〈ひらがな〉口語文とし、かなづかいはおおむね〈現代かなづかい〉に従い、漢字は原則として当用漢字を用いた。ただし、原典の引用、固有名詞、歴史的用語その他は例外として扱い、必要に応じて()内に読みがなをつけた。
2. 動・植物名、元素名、化合物名、鉱物名で当用漢字のないもの、日本神名および〈カタカナ〉を慣用としている特殊の語は〈カタカナ〉書きとした。
3. 年代は、原則として西洋紀年を用い、必要に応じて日本・中国その他の暦年をつけた。
4. 度量衡は、原則としてメートル法を用いたが、慣用に従って尺貫法、ヤード・ポンド法を用いた場合もある。

●外国語について●

1. 欧文の地名・人名については、可能なかぎり現地読みに近いものをとったが、慣用の読み方に従って例外としたものも少なくない。
2. ギリシア語、ロシア語のローマ字へのおきかえはつぎのようにした。
 - a. ギリシア語
η=e ω=o x=k χ=ch
 - b. ロシア語
а=a б=b в=v г=g д=d
е=e ё=yo ж=zh з=z и=i
й=i к=k л=l м=m н=n
о=o п=p р=r с=s т=t
у=u ф=f х=kh ц=ts ч=ch
ш=sh щ=shch ъ=' ы=y
ь=' э=e ю=yu я=ya
3. 上記のほか、欧文の地名・人名の〈カタカナ〉による表記は、おおむねつぎの基準に従った。
berg〔スウェーデン〕〈ベリー〉 Strindberg ストリンドベリー
cu〔スペイン〕〈クァ・クィ・クェ・クォ〉 Ecuador エクアドル
d〔独〕語末では〈ト〉 Wieland ヴィーラント
de〔仏〕〈ド〉 de Gaulle ド・ゴール
dou〔仏〕〈ドゥー〉 Doumer ドゥーメル
du〔英・仏〕〈デュ〉 Durand デュラン
ド; Dumas デュマ
du〔独〕〈ドゥ〉 Durst ドゥルスト
er〔英・独〕語末では〈アー〉 Parker パーカー; Herder ヘルダー
g〔独〕語末では〈グ〉, ngは〈ング〉, igは〈イヒ〉 Hamburg ハンブルク;
Lessing レッシング; König ケーニヒ
gn〔仏・伊・スペイン〕〈ニャ・ニュ・ニエ・ニョ〉 Auvergne オーヴェルニュ;
Bologna ボローニャ

gu〔伊・スペイン〕〈グァ・ギィ・グェ・グォ〉 Paraguay パラグアイ
ia〔一般〕語末では〈イア〉 Asia アジア
io〔伊〕〈ヨ〉(拗音) Boccaccio ボッカッチョ; Giorgione ジョルジョーネ
j〔スペイン〕〈ハ行音〉 Juárez フアレス
je〔一般〕〈イエ〉 Jena イェーナ
ley〔英〕〈リー〉 Huxley ハクスリー
ll〔スペイン〕〈リャ・リョ〉, 南アメリカでは〈ヤ・ヨ〉 Castilla カスティリャ; Trujillo トルヒョ
oi, oy〔仏〕〈オワ〉 Boileau ボワロー
pf〔独〕〈プ〉 Pfitzner ピッツナー
ph〔ギリシア〕〈フ〉 Aristophanes アリストファネス
qu〔伊・ラテン〕〈クァ・クィ・クェ・クォ〉 Quirinius クィリニウス
ray〔英〕〈レー〉 Thackeray サッカレー
son〔英〕〈ソン〉 Edison エディソン
sp, st〔独〕語頭では〈シュブ・シュト〉 Spranger シュプランガー; Storm シュトルム
stew, stu〔英〕〈スチュ〉 Stewart スチュアート; Stuart スチュアート
swi〔英〕〈スウィ〉 Swift スウィフト
thi, ti〔一般〕〈ティ〉 Thiers ティエール; Tiziano ティツィアーノ
thu, tu〔独・ラテン〕〈トゥ〉 Tum-lirz トウムリルツ; Tacitus タキトゥス
thü, tü〔独〕〈チュ〉 Thurnau チュルナウ
tou〔仏〕〈トゥー〉 Toulon トゥーロン
tu〔英・仏〕〈チュ〉 Tunisia チュニジア
v〔ラテン〕〈ウ〉 Vergilius ウェルギリウス
v〔スペイン〕〈バ行音〉 Verasquez ベラスケス
w〔独〕〈ヴ〉 Wagner ヴァーグナー
x〔一般〕〈クス〉 Xenophon クセノフオン
y〔ギリシア〕〈キュ〉(拗音) Dionysos デイオニュソス
zi〔独〕〈チ〉 Leipzig ライプチヒ; ただし語頭では〈ツィ〉 Zimmermann ツィンマーマン
zi〔伊〕〈ツイ〉 Venezia ヴェネツィア
zü〔独〕〈チュ〉 Zürich チューリヒ

●符号・記号●

〈かこみと送り〉

- 【 】 中見出し語をかこむ。
〔 〕 〈本見出し〉に出る動・植物の漢字および本文中の小見出し語をかこむ。
《 》 書名または題名をかこむ。

- 〈 〉 引用文または語句，とくに注意を
うながす語，書名または題名以外
の編または章などの表題をかこむ。
() 注の類，または読みがなをかこむ。
[] 日本地名の国・県・区・市・町・
村をかこむ。
⇒ 該当項目への送り
⇨ 参照項目への送り

《漢字略語》

国名・地名の略語を用いる場合は，つぎ
の13種にかぎって使用する。
アメリカ(米)；イギリス(英)；イタリ
ア(伊)；インド(印)；オーストラリア
(豪)；オランダ(蘭)；ソヴェト(ソ)；
中国(中)；ドイツ(独)；日本(日)；フ
ランス(仏)；モンゴル(蒙)；ヨーロッ
パ(欧)
ただし，戦争，会議，協定など特定の場
合にかぎって
アジア(亜)；アフリカ(阿)；オースト
リア(奥)；トルコ(土)；プロイセン
(普)；ロシア(露)
などの略語も用いる。

《科学記号または略符号》

- a アール
A アンペア
Å オングストローム
 (=10⁻⁷mm)
A. D. 紀元後
atm 気圧
Auf. l. 版
[α]_D²⁰ 比旋光度(20℃における
 ナトリウム D 線に対し)
B. 湾
bar バール
B. C. 紀元前
Bé ボーメ度
BTU 英熱量
c サイクル
C. 岬
℃ 摂氏温度
ca. 年数の大略を示す。
cal カロリー
Cal 大カロリー
cgs 絶対単位
cm センチメートル(cm²平方
 センチ，cm³立方センチ)
const 定数
d デシ(=1/10)
d¹⁵ 比重(15℃における)
d- 右旋
D. 砂漠
dB デシベル
deg 度(温度)
dyn, dyne ダイン
E 東経
emu 電磁単位
eV 電子ボルト

- F ファラッド
°F 華氏温度
ft フィート(ft²平方フィー
 ト，ft³立方フィート)
g グラム
G ギガ(=10⁹)
G. 湾
gwt グラム重
h 時
ha ヘクタール
HP 馬力
Hz ヘルツ
in インチ(in²平方インチ，
 in³立方インチ)
I. 島
Is. 諸島(列島)
IU 国際単位
k キロ(=10³)
K 絶対温度
kc キロサイクル
kcal キロカロリー
kg キログラム
km キロメートル(km²平方キ
 ロ)
kV キロボルト
kW キロワット
kWh キロワット時
l リットル
l- 左旋
L. 湖
lb ポンド
lm ルーメン
l. t ロング・トン
lx ルクス
m メートルまたは分
m- メタ
M メガ(=10⁶)
Mc メガサイクル
mb ミリバール
mg ミリグラム
mks mks単位
mm ミリメートル

- mmHg 水銀柱の高さ(mm)
mol モル
Mt. 山
Mts. 山脈，山地
mμ ミリミクロン(=10⁻⁹m)
μ ミクロまたはマイクロ
 (=10⁻⁶)
μ ミクロンまたはミュー
 (=10⁻⁶m)
μμ ミクロミクロンまたはミ
 ューミュー(=10⁻¹²m)，
 ただしmμをμμとも記す。
n ナノ(=10⁻⁹)
n_D¹⁵ 屈折率(15℃におけるナ
 トリウム D 線に対し)
N 規定，または北緯
Nr. 号，または番
o- オルト
oz オンス
p ピコ(=10⁻¹²)
p- パラ
P. 半島
pH 水素イオン濃度指数
ppm ピーピーエム(=10⁻⁶)
PS メートル馬力
R. 川
rpm(h)(s) 1分(時)(秒)間回転数
S 南緯
S. 海
sまたはsec 秒
s. t ショート・トン
St. 海峡
t トン
V ボルト
W ワット，または西経
Ω オーム
/ 生没年などの年数の両説
 を示す。
% パーセント
‰ パーミル
♂ 雄
♀ 雌

《地図記号》

記 号	各 国 地 図	分 県 地 図
	国境	県境
	省・州・県境	
	鉄道	国鉄
	特殊軌道	私鉄
	運河	特殊軌道
	主要道路	国道
		鉄道連絡線航路
	パイプライン	
	首都	都道府県庁所在地
	主都(省・州・県)	市
	大都市	
	中都市	町
	小都市・町，その他	村・字，その他
	山頂	山頂
	峠	峠

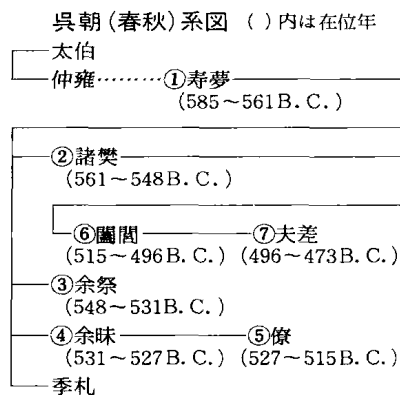
注 その他慣用化している記号は適宜使用した

別刷図版目次

甲殻類	61～64
高山植物	241～244
高山チョウ	253～254
高速道路	375～376
光塑性・光弾性	385～386
高知	395～396
甲虫	405～406
腔腸動物	415～416
鉱物	481～482
高野山	515～518
高麗茶碗	535～536

コ

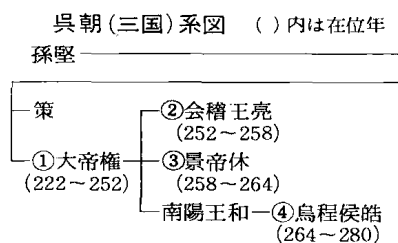
こ 呉(春秋) 中国、春秋時代の国名 (?～473 B.C.)。姫姓。周の文王の伯父太伯と仲雍とが南にいて建国したと伝えられるが、それは後世から付会された伝説で、元来は周族とは別系統の、入墨・断髪の風俗をもつ蛮族であった。前6世紀、寿夢(在位585～561 B.C.)のとき、晋では呉と連合して楚を攻める計略を立て、呉に車戦の法を教えた。呉ははじめて楚を討ち、ようやく強大となり、中国の諸侯と交通するようになり、文化的にも中国の仲間入りするようになった。そのころ中原諸国からは呉とか呉子とか呼ばれていたが、彼ら自身では工呉とか邗王(かんおう)とか称している。寿夢の死後、諸樊(しょはん)のとき、都をそれまでの梅里(江蘇省無錫県東南)から呉(江蘇省呉県、すなわち蘇州)にうつした。その後、数代を経て闔閭(こうりょ)のときには楚を攻めて5戦5勝するほど強大となった。しかし闔閭はそこそこ興隆した越王勾踐(こうせん)のために敗死し、子の夫差が立ってその仇(あだ)をむくいた(494 B.C.)。いきおいに乗じた夫差は水軍を率いて北上して斉を攻め、黄池(河南省杞県)において諸侯と会し、晋と盟主(覇(は)者)の地位を争ったが、このとき、はからずも越軍の攻撃を受けたため、夫差は晋に盟主の地位を譲り、いそぎ帰国して越に和を求めた。しかし越の攻撃はその後もやまず、呉はついに越のために滅ばされた(473 B.C.)。(大島 利一)



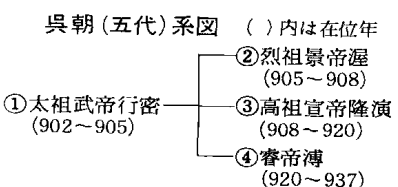
こ 呉(三国) 中国、三国時代の国名(222～280)。漢末群雄の1人である富春(浙江省富陽県)の豪族孫堅が、袁術(えんじゅつ)に属して董卓(とうたく)を討ったことから勢力を得、その長子孫策のとき揚子江東側の諸郡を平定し、その弟孫権にいたって、208年(建安13)劉備(りゅうび)と結んで曹操(そうそう)の大軍を赤壁の戦で大敗させてから、彼らと並んで天下を3分し、その1を領することになった。その後曹操の子曹丕(そうひ)が漢の献帝から禅譲されて魏の皇帝となると、孫権も呉王に封ぜられたが、その翌222年みずから黄武と元号を建てて自立し、229年魏と蜀漢との争いが激化すると、そのすきに乗じて武昌で帝位

につき国号を呉と称し、都を秣陵(現在の南京)にうつし、これを〈建業〉と呼んだ。呉は孫権のときに、外に対しては強敵魏にあたるために蜀漢と結び、さらに南方トンキン(交州)までを領有したばかりでなく、湖南、福建の山越を平定してその勢威を増した。しかし呉の国家は、皇帝孫氏を盟主として呉郡の大姓朱氏、陸氏、顧氏、会稽の大姓虞(ぐ)氏、賀氏、銭塘の大姓全氏、丹陽の大姓朱氏らの江南豪族勢力の連合の上にきずかれていたため、孫権の死後はこれら大姓が相争い、内乱もしばしば起り、国力は伸張せず、263年蜀漢が魏に平定され、魏が晋に代わると、呉は晋にとって唯一の未征服地となり、晋は大軍を派遣して呉を攻撃したので、ついに280年建業は陥落し、呉は滅亡した。しかし江南の地に国家が誕生したことは秦の統一以来最初のできごとであり、このことは江南の生産力があり、文化が開けたことを示すもので、やがて東晋以後、南朝諸政権の基盤がここに開かれたものといえよう。

(西嶋 定生)



こ 呉(五代) 中国、五代十国の国名(902～937)。淮南(わいなん)ともいう。楊行密を始祖とし、彼は淮南節度使をみずから称した孫儒を破って892年唐の昭宗から淮南節度使に任ぜられ、揚州を根拠として淮水の南から江東にかけての約30州の地を確保し、902年呉王に封ぜられた。その死後、子の渥(あく)を殺した徐温が渥の弟隆演を擁立して国政を左右し、910年隆演に国を呉と称して919年武義と建元させ、温の養子知誥(ちこう)南唐の烈祖李昇)は、隆演についで溥をして927年帝を称せしめたが、937年彼に迫ってその位を譲らせ、呉はここに4代36年で滅んだ。(鈴木 俊)



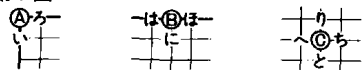
こ 碁 遊戯の一種。囲碁(いご)、棋道(きどう)ともいう。1949年(昭和24)10月に制定された日本棋院の囲碁規約第1章第1条には、つぎのように定義している。〈囲碁は甲及び乙を対局者として、碁盤及び碁石を用い、手合割を定め、規

約に定める着手禁止制限の場合を除く外、盤面における彼我の占める地の多少を争うことを目的として、交互に盤面任意の点に着手し、終局に至り彼我の地を計算して勝敗を決定する。但し、対局者のいずれか一方が敗勢を認め着手を放棄した場合は地を計算しないで勝敗を決定する〉。前者の地を計算する場合は何目勝という結果が確かめられ、後者の場合は中押勝といわれる。また近代にいたって一番勝負の場合、先着の有利を公平にするために、盤上の計算以外に4目半または5目半のハンディキャップをだすことが多い。これをコミ碁という。

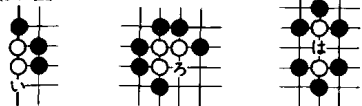
【歴史】碁はインドから中国を経て日本に伝わったという説と、約3,000年以前に中国に発源し発達したとの2説がある。漢、魏以前には盤面の区画は17道289路だったが、唐時代(1,200年前)になって現在行われている19道361路になったようである。多分に易学から影響を受けているらしく、碁石の円は天にかたどり、盤面は周天の日数により、4分した90路は四季に、外周の72路は月齢に、中央の星を天元、黒白は陰陽と見ることもできる。日本に渡来したのは735年(天平7)、阿倍仲麻呂と一緒に唐に行った吉備真備がもち帰ったのがはじめてであるといわれ、平安時代すでに流行していたことは紫式部の《源氏物語》にもあらわれているとおりである。最古の碁譜として伝わっているのは鎌倉時代、松葉谷の草庵(そうあん)における日蓮上人とその弟子吉祥丸との対局であるが、これは後年の作りものであるとの説もある。碁をはっきり専門の域まで高めたのは京都寂光寺の僧日海上人である。この人がすなわち初世本因坊算砂名人で、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3武将は算砂に師事し、いずれも5子を置いたとのことである。家康はしかも算砂を軍師として尊び、常に帷幄(いあく)に参加させ、天下を統一するにおよんでは〈碁所(ごどころ)〉を創設して、碁道を奨励した。殺伐であった戦国時代の人心を平和に統一するために、碁のもつ魅力に着目したからであろう。

江戸時代となって、碁は将軍家の保護によってますます盛んとなり、四つの家元を生んだ。本因坊家(初世算砂)、安井家(初世算哲)、井上家(初世中村道碩)、林家(初世門入斎)の4家で、1644年(正保1年10月)には御城碁(おしろご)の制度も設けられた。家康の定めた碁所は天覧碁の組織、將軍の指南、外人対局の支配、全国棋士の統一および一般における囲碁の代表者として棋士の昇進検定などいろいろの権能をもったので、各家元では碁所争奪のためにあらゆる苦心を傾注した。江戸時代の碁の歴史は一口に碁所をめぐる4家の争いといってよいほどである。この間終始4家の筆頭として棋界をリードした本因坊家の歴代はつぎのとおりである。初世算砂名人、2世算悦上手(じ

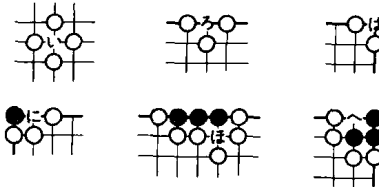
第1図



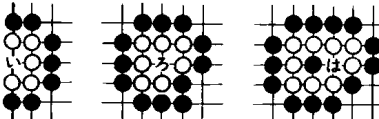
第2図



第3図



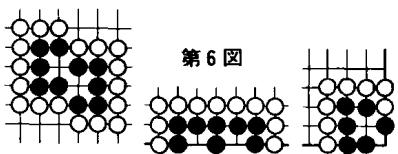
第4図



ょうず), 3世道悦名人格, 4世道策名人, 5世道知名人, 6世知伯6段, 7世秀伯6段, 8世伯元6段, 9世察元名人, 10世烈元準名人, 11世元丈準名人, 12世丈和名人, 13世丈策上手, 14世秀和準名人, 15世秀悦6段, 16世秀元4段, 17世秀栄6段, 18世秀甫準名人, 19世秀栄名人(甫), 20世秀元6段(甫), 21世秀哉名人である。なお安井家からは2世算知名人をだしており, 本因坊道悦との争い碁は有名である。井上家からは初世中村道碩名人, 4世桑原道節名人をだした。林家からは名人はでないが11世林元美準名人は井上家の11世幻庵因碩とともに囲碁隆盛の絶頂といわれる天保・弘化時代をにぎわした存在であった。1841年(天保12)の表によると上手以上8名, 6段6名, 5段10名, 以下257名となっており, 弘化(1844~48)の初年には登録者実に431名と記されている。しかるにこの隆盛をきわめた碁道も明治維新とともににわかに衰運に向かうのを余儀なくされた。御城碁はふたたびみることなく, 自然碁所も廃絶し, 扶持(ふち)を離れた各家元の窮状ははなはだしいものであった。1879年(明治12)ようやく本因坊秀甫によって方円社が組織され, そののち裨聖会, 中央棋院, 六華会など種々の団体ができて離合集散が繰り返されたが, 1924年(大正13)にいたって男爵大倉喜七郎のきも入りで各派の大同団結が行われ, 本因坊秀哉名人を頭に日本棋院が生まれた。その後まもなく雁金準一を盟主に脱退した棋士は棋正社を創立したが, いまは瓊韻(けいりん)社となって別派をなしている。この派を除いて日本棋院は碁界の大勢を掌握して黄金時代を作ったが, 第二次世界大戦で赤坂溜池の本拠を焼か



第5図



第6図

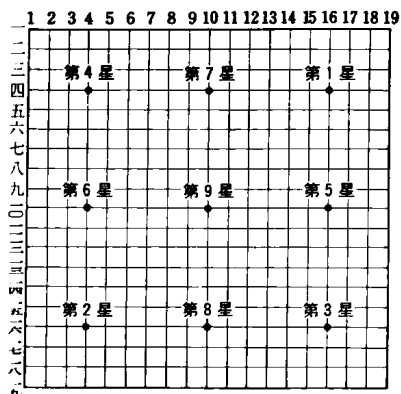
れ, 棋士も相ついで戦禍にあい敗戦後はひじょうな苦難時代を経た。しかしまもなく各新聞碁の復活とともにようやく碁界も活気を帯びて, 再び戦前にまさる隆盛期を展開しつつある。戦争中一時碁界から引退した呉清源も戦後ははなばなしく返り咲き, 橋本宇太郎, 岩本薫を打込み十番碁に破り, ついに1950年(昭和25)に日本棋院から9段を贈られた。また敗戦直後日本棋院を脱退した囲碁新社の棋士たちは数年足らずして復帰したが, 橋本宇太郎は独立して関西棋院を経営, また藤沢庫之助は単身脱退したが後年復帰し, 名を朋斎と改め現在に及んでいる。秀哉名人没後, 名人位をむなしくしていたが, 1962年(昭和37)名人戦が確立し, 第1期藤沢秀行, 第2, 3期坂田栄男, 第4, 5, 6期林海峯, 第7期高川格, 第8期林海峯, 第9期藤沢秀行が, 名人位を占めている。ただし, 名人位を落した者は元の段位にもどる規約になっている。一方秀哉が提供した本因坊のタイトル戦は, 1941年以来争われ, 70年現在, 林海峯が3期連続して本因坊の地位を占めている。この2種のタイトル戦が, 夏の碁界の呼びものとなっている。なお外国での囲碁普及もようやく活況を示し, 1963年には第1回国際囲碁大会が日本棋院主催で開かれた。→本因坊

【競技法】碁は白側と黒側にわかれ, 盤上に交互に1手ずつ石をおろしあつて, 地取りをするゲームで, 現在は上手(うわて)が白を取り下手(したて)が黒を持つのが普通となっているが, 昔はその逆で, <上首把黒下腐把白(じょうしゅくろをとりかろうしろをとる)>などと《爛柯堂棋話》のなかにしるされている。また貴賤, 巧拙, 昼夜によって白黒の石を差別したこともあり, <昼は白石を貴人へまいらせ夜は黒石を貴人にまいらすべし>などという言葉も同じ本のなかにみえている。現在では貴賤昼夜は問題でなく, 巧拙で白と黒をわけており, 先着でかなわぬ者ははじめ2子をおき, それでもおよばぬ場合は3子, さらに4子5子と置いて戦うことになっている。9子を井目(せいもく)というので, 俗にいう<せいもく>党とは初段に9子の階級をさしたものである。この何目か石をさきに置くのを置碁といって, 腕の違う同士の対戦に用いられるすこぶる適切なハンディキャップである。こうしたハンディキャップ制のために, 囲碁は相当腕の違った者同士でも勝負をともに楽しむことができ, このスタートのハンディ以後は終局までいかなる場合でも双方の交互着手は変更することを許されない。つぎに碁の競技の基礎をなす三大ルールがある。すなわち(1)周囲をすきまなく包囲された石は死んでしまう。(2)打つてすぐ死ぬ場所には石を打つことが許されない。(3)しかし打つたとたんにその隣接する敵石が取れる場合は, 打つことが許される。

碁石は上下左右19段の交差する十文字の点に打たれるので, 将棋のように四角の中が着点なのとは大いに異なっている。したがって石をすきまなく包囲するとは, 上下左右の方向だけをふさげばよいので, 的なめの方向は必要がない。第1図のA石は㊸と㊹の2点を包囲されると死に,

B石は㊺㊻㊼の3点, C石は㊽㊾㊿の4点を包囲されると死ぬ。これが囲碁を覚える場合にまず心得るべき四つ目殺しである。殺された石は盤面から取り除かれることになっているので, そのまま取り上げられて, 殺したほうの碁師のふたのなかに保存される。これをハマと呼ぶ。ハマは終局して互いに敵の地域を整理するとき, 敵の地所を埋めるのに利用される。したがって, 取られたあとが敵の地域を形成するばかりでなく, 取られた石がまた最後の埋立に用いられて味方の地域を減らすから, 碁では敵に石を取られるのは大きな損害である。なおA石, B石, C石のように一つだけの石は最小2手, 最大4手で殺せるが, これが2目の石, 3目の石と連続していると, 殺すにはさらに多くの石数を要する。第2図はその例で, 黒はそれぞれ㊸㊹㊺と打つことによってこれらの白石を取るることができる。ことに㊸の点は1石2殺である。第3図上が石を1目取った跡, いわゆるポン抜きの形であるが, この場合は囲まれた抜き跡の㊸㊹㊺の点に黒が打つことは許されていない。これが前述の第2のルールで, これはたいせつな規則である。また, 第3図下について述べると, これも同じことで, ここで黒は㊼とか㊽とか㊾に打つことはできない。つぎに, 第3のルールについて説明すると, 第4図がその例で, ここで黒は㊸㊹㊺と打てば包囲下にあるこの白の1団を全滅させることができる。第2のルールだけならば黒はここで㊸とも㊹ともまた㊺ともその点は四方を白にぎっちりと包囲されている場所だから, 打つわけにはいかないであろう。しかし第3のルールで, 黒は打った瞬間にその包囲の白をぎっちりと逆に包囲するので, 自分が死ぬ前に敵をとってしまうことができるのである。さらにもう一つの約束がある。それは第5図の形における1目取りの手段についてである。ここで黒はもちろん㊸㊹㊺と打つことのできるのは上述のとおりである。その黒が白の1子を取った形でこんどは白のほうからまた㊸㊹㊺に打った黒の1子を取って, 原図のように戻すことができる。そうすると, これは果てしなく続けられるので, 碁は永久に終わらない。この形を劫(きゆう)といって, 劫はすぐに取り返すことができないという約束がこのためにつくられている。日本棋院で制定した囲碁規約の第28条はこの劫の項目でつぎのごとく述べている。——(1)交互に相手方の石1個を取り返し得る形を<劫>と称する。(2)劫が生じた場合において甲が乙の石を取り上げたときには, 乙は1回以上他の個所に着手した後でなければ, 甲の石を取り返すことができない。この目的をもってする他の個所への着手を<劫立>という。甲の着手もまたこれに準ずる。(3)劫立はこれを行わないで劫にある石を取ることにによって生ずる無限の同形反復を防止するためにする着手の制限であつて, これを<同形反復禁止の原則>という。

つぎに石の死活であるが, これが碁ではいちばんむずかしく, またいちばん興味あるものである。活(いき)とはいかにしても敵に殺されぬ状態をいう。ということ, 活とは<眼(め)>が二つ以上あ



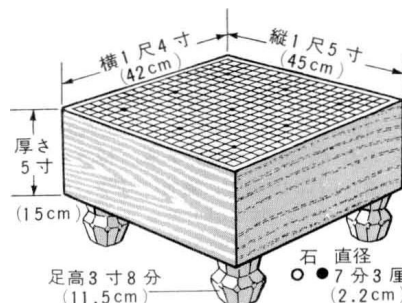
第8図 盤面の位置の表わし方

る形をいうのであり、眼が一つ以下ならその石は死である。囲碁規約第30条を引例すると、〈眼は、着手により一点の周囲八点のうち七点以上を自己の石によって囲んだ中の点であり、交互着手により同様の形となることができる点をいう。但し、碁盤四隅の点(1の一、1の十九、19の一、19の十九)については自己の石により周囲三点を、又、右四隅を除く碁盤四周囲の各点においては、その周囲五点を自己の石で囲んだ点か又は交互着手によって同様に囲むことができる点をいう〉。また、〈眼を二個以上有し、又は交互着手してもこれを二個以上確保することができる形の連続の石は、これを活という〉とあり第6図は活の図である。これらの黒石は相手にすきまなく包囲されているが、眼が二つあるから、殺されることがないのである。

【段位】段位は碁を打つ者の棋力をあらわす標準として用いられている。初段から始まって9段までとし、9段はすなわち名人、8段を準名人、7段を上手、5段以上を高段という古来のならわしであったが、第二次世界大戦後藤沢庫之助8段が大手合で昇段点を獲得して9段位に上がって以来、名人と切り離しての9段が初めて生ずることとなった。その後日本棋院では呉清源にも9段を贈り、また坂田栄男も9段に昇段、また関西棋院の

橋本宇太郎も同院の大手合成績により9段に昇り、続いて多数の9段ができ、その上に1962年(昭和37)10段戦が成立し、第1期橋本宇太郎、第2期半田道玄、第3期藤沢朋斎となっている。ただし10段は優勝者のみで落ちた者は元の段位にもどる規約となっている。初段に続いて級があり級の最上位は1級で以下2級3級と下がっていくことになっている。アマチュアは現在最高を6段まで認められているが、アマチュアの段差はだいたい1段1目見当で免状が発行されている。専門家の場合は2段差で定先、1段差で先相先となっている。

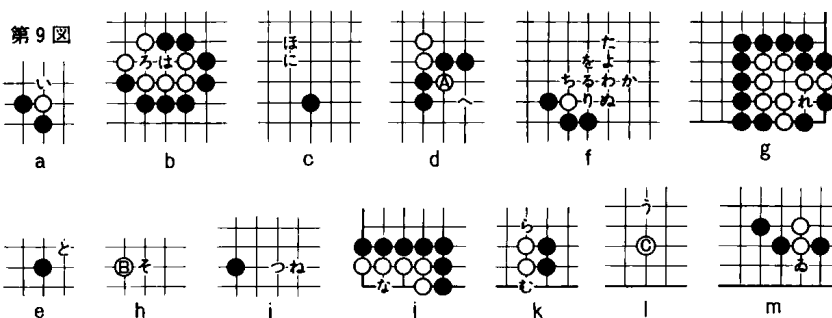
【作法】碁は単なる勝負のほか、これによっての懇親社交と相互の精神修養をも目的とするもので、したがって、対局は終始礼儀を重んじられる。たとえば、開始にあたっては静かに一礼し合ってから第1着をおろすとか、盤とぎとの間の中央に碁器を置き姿勢を正すとか、また碁器のふたは右ひざなめ前においてそのなかに打ち揚げた石(ハマ)を入れ、相手からいつでも見やすいようにすると、細かい慣習があるが、それは結局礼にならなければならないので、いやしくも相手に不快の念を与えたり、これによって紛争をひき起こすことがあってはならない。この意味で対局の場合、厳禁さるべきは〈待った〉である。〈待った〉とは相手が打ってからその前の自分の石を置き直すものである。そそかしい打手が往々世間で言うもので、はなはだしい場合にはなんと2手も3手も前にさかのぼって待ったをするが、これが碁ではい



第7図 用具の標準寸法

ん紛争の禍因となるものである。相手が打たぬ前に一度置いた石を取り上げて打ち直すのも〈ハガシ〉といい、これも待ったに準ずるもので普通の競技会ではこれを禁ずるのを常としている。観戦の場合、盤側からなにかずく盤上の手段についてあれこれいうのは助言として大変失礼なことである。このため思わぬうらみを貰ったり刃傷さしたまで起したことが古来少なくなかった。

【用具と材料】碁石は、これまでは主として円形の石と貝であった。白はハマグリ、シャコ貝などからみがき上げ、黒は那智(なち)石が多く使用された。ガラスに鉛を入れた製品も相当製造され、現在はセルロイド、プラスチックなどの碁石もできている。通常直径は7分3厘(約2.2cm)、厚さは3分〜3分3厘(約1cm)くらいが理想とされ、また手ごろで、3分7厘から4分近いものとなるとすこぶる貴重なものというべきである。1局用としての碁石は黒が181個、白が180個で、全部並べると盤面がちょうど一杯になる



碁の用語解説

天元(てんげん) 盤の中央の星。三三(さんさん) 〈3の三〉〈17の三〉〈3の十七〉〈17の十七〉の4点。隅(すみ) 第1〜4星付近の地域。辺(へん) 4隅の間にある四つの細長い地域。手合(てあい) ハンディキャップの程度。互先(たがいせん) ハンディキャップのない対局。定石(じょうせき) 定跡とも書く。先人により研究され、定められた型。手割(てわり) 着手の機能の比較判断。布石(ふせき) 中盤戦に入る前のおおよその地域を決める石を置くこと。大場(おおば) 布石時代必争の大きい手。実利 直接の得。厚み 外勢の強いこと。実利の反対。地合(じあい) 互いの保有する地域面積の比較。優分(よせ) 収束ともいい、終盤戦の仕上げ。中押(ちゅうおし) 形勢の悪い方が、ばんかいの見込みなく投了すること。作り碁 中押でなく最後の1目まで打ち計算する碁。持碁(じこ) 両者の面積が等しく、勝負なしとなる碁。当り 第9図aの㊸のようにもう1手で敵石を取れる状態。撲(うってがえし) 第9図bにおいて、黒㊸と打ち、白㊹と1目を取らせて再び黒㊸に打って1団の白を捕獲できる。この手段をくう

ってがえし〉という。断(きり) 敵石の連絡を断つこと。愚集(ぐずみ) 石の凝集すること。桂馬(けいま) ふつう小桂馬と大桂馬があり、第9図cの㊸が前者、㊹が後者。門(げた) 第9図dのように、A石の逃亡を防ぐため直接〈当り〉とはならない㊺に打つ手段。尖(こすみ) 第9図eにおける㊻の位置に打つこと。征(しちょう) 当りで連続斜行し、敵石を捕獲する手段。第9図fにおいて、黒㊼、白㊽、黒㊾以下記号順に黒が白を追い、ついに白を取ってしまう手段。ただし、この進行方向の途中に白石があれば〈しちょう〉の成立しない場合がある。持(せき) 2眼を持たず、したがって独立では〈活〉でない石が敵石との関係でとられない状態。第9図gにおいて、2目の黒と8目の白は互いに2眼を持たないが、互いに㊿に打つことができないので、取ることもできないが死ぬこともない。粘(つき) 〈きり〉を防いで連絡すること。頂(つけ) 第9図hのB石に黒㊿とつけて打つこと。その位置によりくうわけ〉〈したつけ〉〈よこつけ〉などとも呼ぶ。飛(とび) ふつう1間飛と2間飛とがあり、第9図iの㊿が

前者、㊿が後者。逸出、攻撃のいずれの場合にも、中央を指向する好手としてひんばんに用いられる。提(とり) 敵の死石を打ち上げて〈ハマ〉とすること。〈劫〉の場合はとくに〈こうとり〉ということが多い。点(なかに) 敵石が2眼をつくれないうちに敵石中に打ち込む手段。第9図jで黒㊿としたような場合である。行(のび) 2石以上密着してのび出すこと。這(はい) 敵石と並行して辺に近く並んでいくこと。夾(はさみ) 敵石をはさみ打ちすること。密着する場合〈はさみつけ〉ということもある。綽(はね) 敵石の進行方向をささぎって直接におさえる手段。第9図kにおける黒㊿または㊿がそれで、後者は〈よせ〉における常用手段である。拆(ひらき) 1路以上飛んで、辺に地域を形成する手段。帽子(ぼうし) 辺にある敵石を上方から1路あけて高圧すること。第9図lで黒㊿は白C石への帽子である。敵地の削減や敵石への攻撃手段として中盤戦に多く用いられる。盤(わたり) 第9図mのように白石の左右の黒が、白石の下を通り、辺に接して連絡すること。

ようになっている。また白色は黒色よりも大きく目に映ずるため、碁石ではとくに白石を黒石よりもすこし小さく仕上げである。したがって黒石の碁器のほうが、白石の碁器よりも深くえぐって底深くつくられているのが常である。碁盤は東西19道、南北19道で、盤面361路。材料は第1がカヤ、第2がイチョウ、第3がカツラの木材と3段階をなしている。また板目を大衆盤とし、柁(まさ)目を高貴のものとしてたつとんでいる。目盛はすべて漆であるが、これにはひじょうな技術を要するので、熟練した工匠を選ばねばならない。ただし、普通に碁を楽しむためには、紙に線を引いてもよく、またセルロイド盤でも、プラスチック盤でもよい。石も紙製でも泥製でもよいわけである。なお現今行われている盤の典型的寸法は第7図のごとくである。また盤面の各着点の呼び方は、第8図のように左から右へ縦の平行線を1, 2, 3線と呼び以下19線まで。また横の平行線を一, 二, 三線と呼び順次十九線まで。その各交点が着手点であり、そこを縦横の数字で表現する。すなわち中央天元の星は〈10の十〉という風である。星の名称は第8図のように日本棋院の囲碁規約で制定されているが、これによると、第1星は〈16の四〉、第2星は〈4の十六〉、第3星は〈16の十六〉ということになる。

(長谷川 章)

こ 語 文法学ではふつう単語の意味に用いる。ただし、国文法で接尾語、接頭語というときには、単語の一部分をなすところの接尾辞、接頭辞(総称して接辞)のことである。また、英語、ドイツ語、フランス語、印欧諸語などというときの語は、単語ではなくて各民族特有の言語体系全体のことである。→単語

(服部 四郎)

ゴア Goa インド共和国西岸、マハラシュトラ、カルナタカ両州の境にある中央政府直轄地。旧ポルトガル領インドの一部で、ダマン、ディウとともに行政上の1単位となっており、面積約3,700km²(ゴアだけでは約3,500km²)、人口795,120(1971調)、主都はパンジム(ノヴァ・ゴア)。1510年にポルトガル人がゴアの一部を占領したときにはビジャプールのスルタン領であった。最初ポルトガルの拠点には西ガーツ山脈から流れ出る二つの川の河口のデルタ地帯にあたるゴア島の旧ゴアに設けられたが、後そこは衰え、18世紀に政庁は西方のパンジムに移り、港としては南方の半島の先端にあるモルムガンが栄えて現在に至る。モルムガン港は防波堤と近代的な港湾施設をもち、ボンベ

イとコーチンの間における最良港である。

モルムガンの東方約3kmのヴェスコ・ダ・ガマ(町)には大きな製油所があり、またモルムガン付近ではマンガンが採掘される。平野部では米、ココヤシ、カシュー・ナット、ピンロウジ、マンゴーなどの産が多く、海岸では製塩が盛んである。またゴアは鉄鉱石の埋蔵が多く、第二次世界大戦までは未開発であったが、日本の鋼管鉱業会社により1951年からシリガオ鉱山の機械化開発が進められた。1968年には年間生産量は約686万t(インド全体の25%)に達し、そのほとんどが輸出され、輸出量はインド全体のほぼ50%を占めている。そのほかチーク材、コブラ、生魚・乾魚、カシュー・ナット、塩、マンガンなどが輸出される。ゴアには1542~52年フランススコ・ザビエルが伝道して以来キリスト教の勢力が強く、人口の34%はキリスト教徒である。旧ゴアには聖フランシス教会をはじめ多くの古い教会があり、今日でも多くの巡礼者をひきつけている。

1947年、インド共和国独立後は、ポルトガル領インドをインド共和国に合併しようとする運動が激しく、ゴア地区では幾度かの紛争が続けられ、とくに1955年には100余名の死傷者を出すに至った。その後も返還運動が続けられたが、インドは61年12月に武力解放を敢行し、ゴアを政府直轄地とした。同時にポルトガル領インドの他の2地域であるディウ、ダマンにも進駐して、同じくインド政府の直轄地とし、62年3月には旧ポルトガル領をインドに正式編入するための憲法改正が下院で承認された。

(川喜田 二郎・中村 平治)

ゴア Charles Gore 1853~1932 イギリスの宗教家。オックスフォード大学に学び、オックスフォードにあるカデスドン神学校の副校長(1880~83)を経て、98年宮廷付牧師に選ばれ、1902年以後ウースター、パーミンガム、オックスフォードの監督を歴任し、19年以後はロンドンで隠退生活を送った。アングリカン・チャーチの監督制を擁護しながらも、キリスト教を近代文化と結びつけようとし、キリスト教社会主義の指導者の1人でもあった。《教会と教職制度》(1889)、《インカーネーション》(1891)その他を著わし、《ルックス・ムンディ》Lux Mundi(1890)の編集者であった。(福田 正俊)

こあおはなむぐり *Oxycetonia jucunda* 鞘し(翅)目コガネムシ科に属する甲虫。本州、四国、九州に分布する。ミカンその他かんきつ類の害虫。成虫は体長13mmくらい、体色は暗緑色、銅かっ色、黒かっ色などいろいろであるが、いずれも、翅鞘に数個の白色紋がある。卵は楕円形、長径1.8mm、初めは乳白色、のちに淡緑色になる。幼虫は体長23mmくらい、頭は暗かっ色、体は円筒状、腹面に曲がる。さなぎは体長14mmくらい、淡黄色。発生は年1回で、冬は幼虫態で地中で越冬。4、5月ころさなぎになり、5月中旬かんきつ類の開花期に成虫が現われ、花のミツを食べる。このため子房はかき傷をつけられ、落果したり、また果実の表面にいなずま形の傷が残る、外観が悪くなる。大発生すると花はほとんど加害

され、損害は大きい。成虫は腐植質の多い土中に潜入して産卵する。卵は6月上・中旬ふ化し、幼虫は土中の有機質や植物の根を食害し、そのまま越冬する。防除法は開花期にMEP、EPN、馬拉ソンなどの有機リン剤を散布するのがもっとも効果的であるが、虫媒を必要とする品種には満開期前の散布は避けたほうがよい。また開花期に成虫を捕殺するのも効果があり、それには朝夕の、成虫の活動の鈍いときに木から振り落とすのがよい。

(山崎 輝男)

こあかさ *Chenopodium ficifolium* ヨーロッパ原産のアカザ科の一年草。アカザより開花期が早く、晩春から花が見られる。畑や路傍に普通に産する。全草薄い緑色で、葉は3裂状に切れ、中央の裂片が細長く、先が鈍くとがっている。新芽はアカザのように赤くならない。若葉はアカザと同じに食べられる。

(奥山 春季)

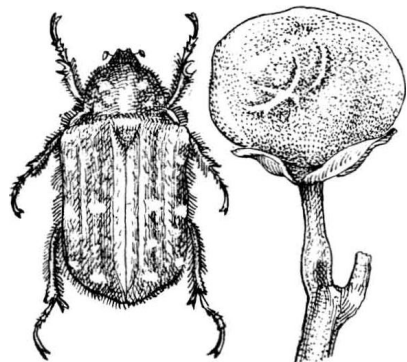
こあかさ *Boehmeria spicata* 山地に普通に見られる落葉低木。イラクサ科。よく枝をわかし、高さ1m以上に達する。葉は長い柄があって対生し、ひし形状卵形で長さ4~6cm(アカソより小形)、先が尾状に長く伸び、普通、茎とともに赤みを帯びている。夏から秋にかけ、葉腋(ようえき)から長い穂状の花序を出して、紅緑色の小さい花が咲く。上のほうが嚕花で、下のほうには球形に集まった雄花がつく。

(奥山 春季)

コアカリキュラム Core curriculum

1930年代以来アメリカ合衆国で提唱され、教育界に大きな反響をよぶにいたった新しいカリキュラム(教育課程)の理論と構想。ただしその思想的伝統は19世紀後半の初めころ、ドイツのツィラーTuiskon Ziller(1817~82)が提唱した中心統合法Konzentrationに由来し、ツィラーが歴史的情操教科を中核教科Zentrumとし他の教科・教材をこれに関連づけることによって全体として統一のあるカリキュラムを構成しようとしたのが19世紀末にアメリカに輸入され、当時すでにコア・コースcore courseという訳語が用いられていた。現代におけるコア・カリキュラムの運動は1934年に公にされたヴァージニア州の教育課程案(ヴァージニア・プラン)に始まる。これは小・中学校11学年を通じて、〈社会生活の主要な機能〉major functions of social lifeとして、生命・財産・資源の保全、物資・施設の生産と分配、物資の消費、通信と輸送など11の領域をとり、その学習を11学年のおおのに配当したものをコア・コース(コア・カリキュラム)とし、小学校ではこれを中心としながら、そのほかに音楽・図工・文学・体育および読み・書き・算術その他の技能の学習を配し、中等学校ではこの総合的な社会的問題を中心とするコア・コースのほかに数学・体育などを加えた必修課程のほかは、すべて選択科目とした。ヴァージニア・プランは広範な反響をよびその後アメリカの多くの州、多くの学校でこれに類似する総合的なコア・コース(中心課程)をもつカリキュラムが作製され、試行された。また日本でも第二次世界大戦後アメリカにおけるコア・カリキュラム運動の影響を受けつつ、コ

コアオハナムグリ 左は成虫、右はミカンの幼果の加害状況



ア・カリキュラムの研究と試行が活発に行われ、コア・カリキュラム連盟(1948年創立。現在、日本生活教育連盟)がその運動の中心となったが、カリキュラムの形態以前の現実的な問題が自覚されるにつれて運動は停滞した。

なおコア・カリキュラムという言葉は、ある場合にはコア・コースすなわち全カリキュラムの中核となり、統合の中心となるコースを意味し、またある場合にはこのようなコア・コースをもち、それを中心として統一的な構造をもって構成されたカリキュラムの全体を意味し、必ずしも一義的でない。→教育課程

(梅根 悟)

こあげ 小揚 江戸時代、江戸に入港する船積米の陸揚げに関与した職業。商人米の場合には、荷主たる船頭と、買方たる〈下り米問屋〉ならびに米仲買の間で売買が成立し、米仲買の指定する倉庫に米荷の水揚げが行われる。しかし海上輸送のさい倭が痛み、あるいは濡(ぬれ)米などが生ずることもしばしばあり、このため生ずる荷主と買方の紛争を防ぐのに〈樹回(ますまわし)〉と称する倭の検査が必要であった。この樹回を行う調査人を小揚師と称した。商人米のほかに浅草の米蔵に輸送される御蔵米については、幕府の浅草蔵役人の中に、〈小揚者〉という下級吏員がおかれていた。これは小揚頭、杖(つえ)突、平小揚の3者の総称である。人数は時代により変化があったらしいが、だいたい200人前後で〈浅草御蔵旧例書〉には小揚頭は18人・5両2人扶持、杖突は27人・3両1人半扶持、平小揚は199人・1両1人半扶持とある。小揚人の役目は、蔵納める米の検査を行って、悪米をはねだすことであった。このため縁故ある納宿(おさめやど)や納名主などへの最負(ひいき)もあったらしく、悪米の選別や秤量について公正に行うべしとの注意もだされている。

(村井 益男)

コアジアしょぞく 古アジア諸族 古アジア諸族Palaeoasiaticsは、旧シベリア諸族、あるいは極北諸族とよばれることもある。アジアの極北地帯に最も古くから住むと考えられている諸種族。北東アジアのチュクチ、その南のコリヤーク、さらにその南につづいてカムチャツカ半島のカムチャダール(イテリメン)、チュクチの西、北極海寄りに住むユカギール、その南、コリマ川中流からオモロン川上流にわたるユカギールの一支族チュヴァン、南方ではアムール河口と北サハリンに住むギリヤーク、南サハリンと北海道のアイヌをふくむ。はるか西方のイエニセイ川中流域に住むイエニセイ族も古アジア諸族とよばれることがある。これらの諸種族の言語は、北アジアにひろがったアルタイ語族のトゥングース系およびトルコ系の諸言語とはっきり区別され、むしろアメリカ・インディアンの諸言語と遠い親縁関係にあるらしいので、古アジア語族の名で一括され、古くシベリアの全域にひろがっていたのが、後に来たトゥングース語群やトルコ語群のために寸断もしくは吸収されたものと考えられている。しかし古アジア族の諸言語相互の関係については、チュクチ語、コリヤーク語、カムチャダール語の近似という

点を除いてはまだほとんど明らかでない。彼らの人種形は、オイロピーデ(白人人種)の特徴の顕著なアイヌを除いては、モンゴロイド(黄色人種)に大別されるが、また多かれ少なかれコーカソイド的の諸要素も認められ、多くの人類学者は古くヨーロッパからシベリアに伸びたオイロピーデのなごりがその基層に存するものと考えている。ほぼ同様な寒帯の自然環境に住む彼らに共通した生業は漁労と狩猟であり、とくに河川におけるサケ、山地におけるクマ、海上におけるアザラシ、セイウチ、クジラなどの捕獲は伝統的なものであった。またトナカイの生息するツンドラ地帯ではトナカイの狩猟または飼育を行う。チュクチ、コリヤークなどは海岸に近く定住して漁業に従事する海チュクチ、海コリヤークとよばれるものと、奥地になかば家畜化したトナカイの群を追って遊牧するトナカイ・チュクチ、トナカイ・コリヤークと名づけるものとに分れる。古アジア族はほとんどすべてクマ祭の狩猟儀礼を行ってきたし、古来のシャーマニズムの信仰習俗も根強く残っているが、ソヴェト領の諸種族はここにち名目上ロシア正教会に属し、衣食住その他生活様式一般もすでにいちじるしくロシア化した。たとえばカムチャダールなどは人種的にも文化的にもロシア人と強く混交している。→旧シベリア諸言語

(石田 英一郎)

こあじさい *Hydrangea hirta* 日本特産の落葉小低木。ユキノシタ科。一名シバアジサイ。アジサイの仲間であるが、飾花が全くなく、枝が細い。若い枝や葉にはあらう毛がある。葉は倒卵形で、質が薄く、対生し、長さ5～7cm、縁には鋭いきょ歯がある。6～7月ころ、新しい枝の先に青みのある紫色の小さい花が散房状にたくさん集まって咲く。両性花で、がく、花弁ともに5個、雄しべは10本。果実は広卵形で、上のほうに3本の花柱が残っている。

(奥山 春季)

こあじさし *Sterna albifrons* 本州で繁殖し、夏のあいだ普通に見かけるカモメ科の水鳥。アジサシによく似るが、はるかに小さく(翼長約18cm)、額が白く脚がだいたい色の点で異なる。秋は南洋方面に渡る。→あじさし(今泉 古典)

こあぜかやつり *Cyperus haspan* 水田など湿地に普通に見られるカヤツリグサ科の多年草。茎は柔らかく、高さ20～60cm。基から細長い地下のつるが出る。花序は夏秋の候に茎頂に生じ、1～2個の葉状の包がある。小穂は線形で、多少血赤みを帯び、長さ5～15mm、幅1.5～2mm。本州以南、朝鮮、中国からインド、マライシア、オーストラリアなどに広く分布する。

(大井 次三郎)

こあぜてんつき *Fimbristylis aestivalis* 本州の低地にまれに見られるカヤツリグサ科の小形の一年草。茎は高さ3～15cmで、株になって多数根生し、葉は細長くて毛がある。小穂は夏秋のころ茎頂に十数個つき、長さ3～7mm、幅1.5mm。小形の鱗片の内面にはレンズ形、淡黄色の小形のそう果がつく。東アジア、イン

ド、マライシアにかけて広く分布する。

(大井 次三郎)

コアセルベート Coacervate ある条件におかれた親水コロイドの溶液は、分散と凝固との間の状態において、コロイドに富み流動性をもつ層、すなわちコアセルベートと、コロイドに乏しい平衡液の層とに分離する。この現象をクルイト H. R. Kruyt はコアセルベーションとよんだ。コアセルベートは顕微鏡によって認められる程度の大きさに集まったコロイドの滴が、平衡液の中にはっきりした界面を保って散在している状態で、この小滴どうしは混じり合うことができ、また、水を過剰に加えれば、この小滴が消失して、コアセルベートはゾルの状態にもどる。このような現象は多くの物質系に起りうるものであるが、ソヴェトのオパーリン A. I. Oparin は生命の発生、すなわち有機物質から原形質への発達の物理化学的な機構として、コアセルベート生成を考えた。

(古谷 雅樹)

こあつもり 小敦盛 薩摩琵琶(さつまびわ)の曲名。島津兵庫頭作歌。作曲者・作曲年代不詳。源平合戦のとき一ノ谷で少年平敦盛が熊谷直実に討たれた物語を歌ったもの。初段と二段との2部からなる。初段は熊谷が敦盛を呼び返すまで、二段は熊谷が敦盛を討ってから無常を感じ世をすてて敦盛の菩提(ぼだい)を弔うに至るまでを歌う。琵琶歌中の名曲である。筑前琵琶にも同様の歌があり、〈敦盛〉と呼ぶ。遠邑玉蘭作歌。

(田辺 尚雄)

コアぼり コア掘 地下の地質を知るには、井戸を掘り、またはボーリングをおこなう。この場合に地下の地質が自然の状態を保つように、中心部は何もなく、周囲にだけ歯のあるビットを使用する。このビットにより穴を掘ると、細長い地質のサンプルが得られる。これをコア coreといい、コアをとる目的で掘ることをコア掘(coring)という。ビットはやわらかい地質に対しては数枚の板状の鉄の歯に硬質金属を植えたものを使用し、堅い地質に対しては歯車を使用し、さらに堅い地質に対してはダイヤモンドの粒を植えたものを使用する。コアの直径は、堅い地質に対しては20mmくらいのものが多いが、石炭や石油に関係のある地質では60mm以上のものが採られ、ときには120mm以上のものも採られる。(藤井 清光)

こあみ 小綱 ⇨レチクル

コアラ Koala *Phascolarctus cinereus* 別名コモリグマ、フクログマ。外形がおもちゃのクマにそっくりの有袋目ユビムスピ科の獣。体は太く長さ80cmくらい、耳大きく尾はほとんどない。手の第1、2指は第3～5指に向かい、各指には鋭いかぎづめがある。足は人の手に似ていて、第1指は側方に突き出ており、つめを欠くが、他の指にはかぎづめがあり、第2、3指はゆ着する。この手足で枝を握り、木登りがうまい。口内にはほお袋があり、盲腸はきわめて長く1.8～2.4mに達する。雌には育児嚢があり、その口は後方に向かい、乳頭は2個。毛は羊毛状で上面は灰かっ色、下面黄白。オー



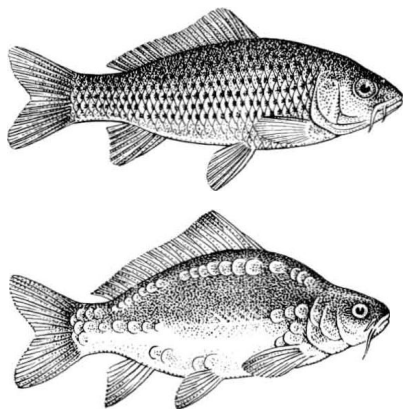
コアラ

ストラリア南東部の森林の樹上に住み、ユーカリの葉を主食とし、ほとんど地に降りない。約35日の妊娠の後、長さ2cm、重さ5.5gくらいの子を普通1匹産む。子は自力で育児嚢にはいり、約2ヵ月この中で過ごす、その後は1年くらい母の背におぶさる。性質は温和でよくなれる。毛皮は良く、1908年にはシドニー市場だけで57,933枚も取引されたが、最近ではきわめて少なくなった。(今泉 吉典)

こあんこく 胡安国 1074~1138 中国、宋代の儒学者。字(あぎな)は康侯、諡(おくりな)を文定という。宋の崇安(福建省)の人で、宋の哲宗の紹聖年間(1094~97)に進士になり、太学博士に選抜された。高宗のとき中書舎人になり、侍講を兼ねた。人物は潔白で、時の権力者におもねることがなかったという。著書には《春秋伝》および《通鑑挙要補遺》があるが、とくに前者は、春秋の大義を明らかにすることを目的にし、華夷(かい)の別をはっきり立てた。のち朱子学派の五経のうちに、この《春秋伝》が取り入れられた。(市川 安司)

こあんてい 胡安定 993~1059 中国、宋代の儒学者。本名は瑗(えん)、字(あぎな)は翼之、安定はその号。諡(おくりな)を文昭という。宋の海陵(江蘇省)の人。范仲淹の推薦で、宮中の雅楽を校定し、校書郎を授けられ、ついで湖州(浙江省)の州学の教授になった。そこで経義・治事の2部門を設け、学生の性向に従って教育したが、学問の目的は、実際の役に立てるという点におき、ただちに経書の本旨を掌握し、それを日常生活に生かそうとした。孫泰山や石俎徠と親交があり、北宋のきわめて特色ある教育家であった。(市川 安司)

コイ

皮ゴイ(アイシュゲル
ンド種)

こい 故意 民法上は、故意は過失とならんで不法行為の要件であるが、故意でも過失でもよいので、故意の内容をとくに厳密に論じる必要はない(民法第709条参照)。これに反して、刑法上は、とくに過失を罰する規定がないから、故意がなければ犯罪が成立しないので(刑法第38条第1項)、その内容がとくに問題とされる。すなわち故意が成立するためには、第1に、行為者が犯罪構成事実を表象し、かつこれを認容したことを要する。たとえば、殺人罪についていえば、自分の行為が相手の死亡の結果を発生させるであろうことを知っていて、しかも、そのような結果が発生すればしてもかまわないと思っていたことを要するわけである(もっとも、事実の表象だけで十分だという説や、反対に結果の発生を希望することが必要だという説もある)。このような認容がある以上、結果の発生を確定的なものとして表象する必要はない。たとえば、自動車を運転して歩行者のそばをすりぬけようとしてこれをひき殺した場合に、くもしひき殺せば殺してもかまわない》と思っていたならば、殺人罪の故意があったことになる。これを《未必の故意》という。このような認容がなければ過失にすぎない。なお、事実の表象の関係で、事実の錯誤が問題となる。たとえば、物をこわそうと思って投石し、誤って人を死亡させても、殺人罪の故意があったとはいえない。これに反して、たとえば、甲を殺そうと思って発砲してこれを死亡させたところ、それが実は乙であった場合はむろんのこと、甲をねらった弾丸がそれて乙に命中しこれを死亡させた場合にも、乙に対する関係でやはり殺人罪の故意があったとみるべきだというのが現在では通説になっている。また、正当防衛の要件たる事実がないのに、その事実があるように誤認したような場合は(たとえば強盗犯人と誤認して射殺するなど)、故意はなかったものと考えるのが通説である。第2に、違法性の意識、つまり自分の行為が違法な行為だということを意識していることが故意の要件かどうかについては学説が分れている。刑法は《法律ヲ知ラサルヲ以テ罪ヲ犯ス意ナシト為スコトヲ得ス》と規定しているだけであるが(同法38条3項)、判例はこれをたてにあって、違法性の意識は故意の要件ではないとしている。第3に、期待可能性が故意の要件だというのが新しい考え方である。具体的な事情のもとに、行為者がその行為をしたのはまったく無理もないことだ、つまり、その行為をしないことは期待できないことであった、という場合には、行為者に非難を帰することができないから、故意の成立が認められないというのである。下級審にはこの理論により無罪の言渡しをした事例が幾つか現われている。→過失(団藤 重光)

こい [鯉] Cyprinus carpio コイ科の淡水産硬骨魚。原産地は黒海・カスピ海沿岸の中央アジア、または中国といわれる。古くから人に飼育されて各地へ移殖され、現在は極北地方、南アメリカ、マダガスカル島、オーストラリアなどを除く世界各地に分布し、世界を通じて最もよく知られている魚の一つである。コ

イは多年飼育されている間に体型、色彩の異なるいくつかの品種を生じたが、その原型(下図上)は前後に長く、断面は楕円形に近い体をもつ。背は暗かった色、体側は黄金色をおび、腹面は白、または淡灰色。11は体の前端にあり、上あごのへりに2対のひげがある。11には歯がなく、のど(下咽(いん)頭骨)に計10個の臼(きゅう)歯がある。背びれは約23本、しりびれは約8本の軟条からなり、前方の3本は強いとげとなる。頭を除く体の表面はしょうぶな丸形鱗でおおわれ、その数は側線上で約36枚ある。食用ゴイの養殖の盛んなオーストラリアなどでは、この原型とかなり異なった養殖用品種がいくつかつくり出され、いずれも体高が高く、肉が多く、成長が速いのが特徴で、そのうち《皮ゴイ》(下図下)とか《鏡ゴイ》と呼ばれる諸品種では、鱗が著しく退化し、側線上とひれのつけねに少し残っているだけである。これらは《ドイツゴイ》の名で1904年ころ日本にも輸入されたが、外見が奇異なため需要がなく、現在は養殖されていない。ヨーロッパでは調理に都合がよいので鱗のない品種が喜ばれる。一方アジアでは觀賞用の品種がつくられた。赤い緋(ひ)ゴイ、黄色い黄ゴイは中国でつくられ、日本ではこれらと普通ゴイを交雑して赤白ゴイ、三色ゴイ、五色ゴイなどの各種の色ゴイ(ニシキゴイ)をつくり出した。色ゴイの産地としては新潟県が有名である。

コイは池、沼、川の下流など流れのごくゆるやかな淡水域を好み、海水の多少混入する河口付近にも住むが、山間の急流には住んでいない。雑食性で、水中の小動物(ミジンコ、こん虫の幼虫など)、底泥中の動物(ミミズ、貝類など)、水草を食べる。釣えさにはミミズ、サツマイモ、ウドンなどを、養殖用人工餌(じ)料としては豆類、穀物、魚粉、肉粉(ヨーロッパ)、蚕のさなぎ、大麦、大豆(日本)などを与える。水温15~24℃のとき盛んにえさをとって成長し、8℃以下では水底近くに静止して活動しない。したがって北半球の温帯地方では4~11月が成長期で、冬はほとんど成長しない。全長80cm、体重15kg以上に達し、寿命は普通20年、まれに50年に及ぶ。雄は3年、雌は4年で成熟し、産卵期は晩春~初夏で、卵(直径1mmあまり)は水辺の水草などに産みつけられ、約1週間でお化す。雌は10万~30万粒以上の卵を産む。コイは環境に対する抵抗力と繁殖力が強く、移殖された湖沼河川で在来種を追い抜いてどんどん繁殖する。アメリカ合衆国を例にとれば、野生ゴイの漁獲量は8,500t(1947)に及ぶが、食用としてあまり歓迎されないうえに、ふえすぎて他の魚や水鳥のすみかや食物を奪うようになったので、今では駆除が行われている。

〔食用ゴイの養殖〕現在アジアでは日本、中国、朝鮮など、ヨーロッパではオーストラリア、ドイツ、フランス、ベルギー、イタリア、ハンガリー、ポーランドなどで食用ゴイが養殖されている。養殖技術は日本、ドイツおよびオーストラリアが最も進んでおり、両者を比較すると、次のようになる。(1)養殖品種 日本では鱗のあるコイ、ヨーロッパでは主として皮ゴイ、鏡ゴイである。(2)養殖期間 日

本では750gくらいの〈切りゴイ〉の需要が多く、2年(ときに3年)間でこの大きさに育てる。ヨーロッパでは3年間で1～1.5kgに育てて売り出す。(3)人工餌料 日本では池の面積に比べて放養尾数が多いので、第1年目から人工餌料を与え、2年目はこれだけで肥育させることさえある。ヨーロッパでは天然餌料に多く依存し、第1年目は人工餌料を全然与えず、2、3年目も天然餌料の1～4倍量与えるだけで、したがって放養尾数は少ない。(4)分業 ヨーロッパでは各養魚業者が採卵から食用ゴイ生産まで一貫作業を行うが、日本では採卵を行う業者、卵から青子(あおこ一生後約1ヵ月)を育てる業者、青子を種ゴイ(満1年、10cm、40g内外)に育てる業者、種ゴイを切りゴイに育てる業者などに分化している。(5)養魚池 ヨーロッパでは止水池を用い、池は大きく(多くは20～200km²)、各業者は合計300～500km²の池を用いて一貫作業を行う。日本では分業化しているため各業者は少数の養魚池しか持っていない。これには止水、流水の2型があり、大きさは10km²以下で、他に水田やかんがい用ため池を有効に利用する。すなわち日本ではヨーロッパより分業化した集約的な養殖が行われている。成長度は、ヨーロッパでは1、2、3年目の秋の体重が30g、300g、750～1,250gくらい、日本では1年目の秋までに35～500gの各種の大きさに育て、2年目は種ゴイから始めて、流水池では700g、止水池、水田、ため池で450gくらいに育てる。(6)流水式養殖法 水の豊富な長野、群馬、岐阜県などで行われ、魚の肥育はまったく人工餌料に依存し、面積当りの収穫量は他の方法の数百倍に達する最も集約的な養殖法である。30m²内外、水深約2mの池に毎秒20l以上の水を流し、ここにコイ約2,000尾を放養する。(7)稲田養鯉(とうでんようり) 日本の水田では青子、種ゴイ、食用ゴイが生産され、稲田養鯉と呼ばれて農家の有利な副業となっている。この場合コイは稲作に害を与えない。東南アジアの米作地帯では、この技術を導入して水田で魚を養殖し農民の食事を改善しようと企んでいる。ヨーロッパにおけるコイの移殖経路は、ギリシアへは前3世紀ごろにキプロス島(コイの属名キプリヌスCyprinusは同島の名に由来するという)を経て渡来していた。中部ヨーロッパへ輸入されたのは14世紀以後のことで、十字軍遠征の結果であり、初めハンガリー、オーストリアに輸入されたものが、しだいに近隣諸国に移殖されていった。ロシアには18世紀に、北アメリカには19世紀になって移殖されている。(小山 治行)

池面積1m ² 当りの収穫量 (単位 g)		
	ヨーロッパ	日本
1年目	12	10(無給餌) 37(給餌)
2年目	500	170(水田、ため池) 500(止水養魚池) 11 000～57 000 (流水養魚池)
3年目	30～100	

〔沿革〕コイは別名を〈三十六鱗〉とも〈六穴魚〉ともいうが、これは背面1列の鱗が36枚あるといわれるところに基づいている。コイの養殖の歴史は古く、中国では前5世紀に養殖法が記述されている(陶朱公范蠡(はんれい)の〈養魚經〉)。日本でも景行天皇がコイを池に放したとの記録がある(1世紀ころ)。中国の古いことわざに〈六々変じて九々鱗となる〉というのがあるが、九々鱗とは竜のことで、竜には鱗が81枚あるという伝説に基づくものであり、また黄河上流に〈竜門〉と呼ばれる急瀬があって、どんな魚もそこは登れないのに優秀なコイだけは登りえて竜になるというたとえ話から、人間の栄達にこれをなぞらえて〈登竜門〉という言葉も生まれた。日本でも大和(奈良県)吉野川の上流に〈竜門〉という地名を設けたりして、コイを〈出世魚〉と称するようになり、これをめでたい魚として自在かきや端午の節句の轆(のぼり)などにかたどったりするほか、一般の祝儀の料理に用いられるようになった。しかし結婚の祝儀と妊婦の着帯式にかきつてコイは用いられない。それはコイの腹部にある第5のひれが〈子とどめのひれ〉と呼ばれるからで、事実、はらみゴイの産卵直前に、これを適温の水中から取り出して急に冷水の中に放つと、そのまま産卵を中止して翌年の同季節になるまで繁殖しなかった、という実験例もある。もっとも平安時代(784～1191)にはコイを池に入れてむしろ観賞を主とした。食用とされてからは清冷な水に住むものを上品とし、清流の多い日本ではそれに適する品種が発達し、第1は長流、次が大湖で、池沼に住むものは劣るとされた。室町時代(1393～1572)以降〈淀(よど)コイ〉が名物の首位にあげられたのは、淀川が近畿地方における随一の長流であったからである。茶道興隆の室町後期に食通といわれていた幕府の管職細川勝元は特にコイを好み、〈他国の鯉は作りて酒に浸すとき、一両箸(ちよ)に及べばその汁濁れり、淀鯉はしからず、いかほど浸せども汁は薄くして濁りなし、これ名物のしるしなり〉といったとあるように、コイを酒に浸すというのは、〈なます〉に煎酒(いりさけ)を用いる当時の代表的コイ料理であった。なお関東では利根川のコイが有名である。【調理】タイを〈海魚の王〉というのに対し、コイは〈川魚の長〉と呼ばれ、夏は〈あらい〉、冬は〈なます〉とし、コイこく、あめ煮、生作りなど四季を通じて賞味される。コイを調理するさいには青肝(おあきも)または苦肝(にがきも)と呼ばれる胆嚢をつぶさない注意が必要で、普通、首のつけ根から鱗3枚目のところを筒(つつ)切り(ぶつ切り)すると、胴の切口にのぞいて見えるので容易に取り出すことができる。生作り、あらい、なますは新鮮を尊重する料理法で、酢みそやからし酢みそが調和する。煎酒は酒を煮つめたところへ梅干、塩またはしょうゆを加えて煮ましたもので、おもになますに用いられる。〈コイこく〉はコイの濃漿(こくしょう)の略で、丸のまま2cmくらいに筒切りしたコイを長時間みそ汁で煮たもので、煮込むほどよく、最初は薄みそに仕立て、弱火で煮込んでから、食

べる前に新しくみそを加えるというそう風味がよい。薬味としては粉サンショウを振り込む。鱗は煮ると柔らかになるので、そのまま用いてその歯ざわりを賞味することもある。中国では献立に単に魚というとコイをさすほど一般に使用されているが、日本で俗に〈コイの丸揚げ〉といわれるタンツクリューユイ(糖醋溜鯉魚)や、ホンシャオリューユイ(紅焼鯉魚)が特に有名である。(本山 荻舟)

こい 五井 〇市原(いちばら)〔市〕

こい 五位 仏教用語。(1)一切万法を五つの位次に類別したものをいう。すなわち色法(しきほう)、心法、心所有法、心不相応法、無為法の5法である。色法は物的なもの、心法は根本となる心、心所有法は心のはたらき、心不相応法はたとえば生滅変化するような存在のあり方、無為法は生滅変化がなく、働きを起すことのないものをさす。俱舍論(くしゃろん)ではこの五位をさらに分類して色法に11、心法に1、心所有法に46、心不相応法に14、無為法に3、合わせて75法とする。これを五位七十五法という。大乘の唯識では心法に8、心所有法に51、色法に11、心不相応法に24、無為法に6、合わせて100法として、これを五位百法という。五位はまた五事、五法、五品ともいわれる。(2)大乘の菩薩(ぼさつ)の修行の5階位をいう。唯識学派では菩薩が長時の修行を経て仏になるまでの階級を分けて、一に資糧位、二に加行位(けきょうい)、三に通達位、四に修習位、五に究竟位(くきょうい)の5階位に分ける。資糧位は仏となる資糧すなわちもとの位、加行位はもとでの上にさらに修行を加える位、通達位は真如の理に通達した位、修習位は幾度もその真如の理を修める位、究竟位は最後の仏となった位で、資糧位は初発心より十回向(えこう)に至る十住、十行、十回向の三十心の位であり、加行位は四善根(十回向の満心)の位であり、通達位は十地の最初の第一地の位であり、修習位は第二地以上の位であり、究竟位は仏地の位である。また資糧道、加行道、見道、修道、究竟道の小乗の五位説もいわれる。(3)胎内の五位、胎外(たいげ)の五位をいう。胎児の266日の間の成長期間を5階位に分け、出生して以後の一生涯の期間をまた5階位に分ける。胎内は受胎直後の7日間がカララKalala(羯刺藍)、つぎの7日間がアルブダArbuda(阿部曇)、第3の7日間がペーシPeśi(閉戸)、第4の7日間がガナGhana(鍵南)、その後出生までの238日の間がパラシャーカーPraśākhā(鉢羅奢佉)で、胎外は出生から6歳までの嬰孩(ようがい)、7歳から15歳までの童子、16歳から30歳までの少年、31歳から40歳までの中年、41歳以後の老年で胎内胎外ともに五位をいう。(4)禪宗において心性のあり方を示し、また修行者の悟道に達する階程を明らかにしたものという。洞山良价(807～869)および洞山の弟子曹山本寂(840～901)の唱えた正偏(しょうへん)五位、洞山の唱えた功勳(こうくん)五位、曹山が正偏五位を君臣の關係に配して唱えた君臣五位などがある。正偏五位の正は真如の本体であり、偏は生滅の現象で

あり、陰陽でいえば正は陰で偏は陽である。一に正中偏、二に偏中正、三に正中来、四に偏中至、五に兼中到の正偏の5位で平等と差別の相即関係を説いている。正偏五位を君臣に配すると、一に君、二に臣、三に臣が君に向かう、四に君が臣を視(み)る、五に君臣道合となる。正偏五位は中国においても日本においても時代によって思想的変遷があり、配列にも名称にも若干の異説を生じている。功勲五位は向、奉、功、共功、功功をいい、向はひとびとが本具の仏性に達しようと帰向することであり、奉は仏性に奉順することであり、功は仏性を徹見したことであり、共功は徹見してその上自由な働きを得ることであり、そして功功は無功用(むくゆう)の境に達した功の極処のことである。(古田 紹欽)

こい 呉偉 1459～1508 中国、明代の画家。字(あぎな)は士英または次翁。魯夫または小仙と号した。江夏(湖北省武昌)の出身。8歳のとき海虞(江蘇省常熟)に移り、銭昕(せんきん)一永州知府より参政となる)の家に養われ、彼の子どもの仲間として読書しながら、その間に筆墨をとりはじめ、のち金陵(南京)に行き画名があがった。憲宗のとき仁智殿に待詔となったが、その画風は墨汁(ぼくじゅう)を手にかかせて塗りまくるというやり方で、生活そのものも奔放だったようである。その画はあくまで荒々しい斧劈皴(ふへきしゅん)や強烈な墨筆の使用を特色とする。浙派(せっぱ)画人としての彼は戴文進(たいぶんしん)と張路、蔣嵩(しょうそう)らをつなぐ中間的存在であるが、こんにち常識的に考えられる浙派様式の完成は、戴文進よりもむしろ彼に負うところが大きかったと想像される。彼は沈周、文徵明など南宗画(なんしゅうが)復興者と時を同じくしたため、後世の文人批評家からはあまり高く評価されなかったが、張平山、蔣三松などのように酷評もされていない。筆力の強い画風はいたずらに技巧だけをむき出しにして、〈狂態邪学〉と評された浙派末流の粗放さのものをなしているともいえる。(鈴木 敬)

こい 語彙 ひとりの個人、あるいはひとつの言語集団の言語に表われる単語の総和を語彙という。同じ言語集団に属する個人にあっても、その人の経験、教育、教養、階級、職業などの相違によってその語彙は質、量ともに異なる。ある言語集団の言語の語彙はその集団に属す

るすべての個人の語彙の総和であり、したがってそれら個人の言語活動における共通点ばかりでなく相違点をも含んでいる。これに反して音韻・文法は共通点のみで、個人による相違点を含むものではない。

〔語彙の構造〕語彙はつぎのような種々の観点から分類することができる。品詞あるいは文法機能、語形あるいは造語法、語原、使用頻度(ひんど)、使用分野(たとえば話しことば、書きことば、年齢別、男女の性別、階級別、職業別など)、一般的な意味分野。そのほかにも種々の分類が可能である。語彙をこのように分類した場合、それぞれの分類の中で単語はさらに種々のグループをなして互いに関係している。たとえば、語形に関しては同音語、意味に関しては同義語がそれぞれグループをなす。日本語の語彙には漢語の要素が多いので同音語、同義語がひじょうに多い。語原に関しては外来語、ダブレット doublet などのグループがある。ダブレット(二重語)は同一の祖形から別の経路を経て変化した1組の語をいうもので、日本語の〈かぎ(鍵)〉と〈くぎ(釘)〉、トラックとトロッコ、英語のシャツ shirt とスカート skirt、カメラ camera とチェンバー chamber などがそれである。使用分野に関しては各種の専門語、学生語、流行語、スラング、その他をあげることができる。日本で古来行われている雅語、俗語の別は種々の意味で区別されたが、日常会話に用いる俗語に対して、とくに詩歌文章に用いるものを雅語とする区別が一般的に行われてきた。語彙のうち、社会の一員として正常な生活をしていくのに必要と思われる基本的なものを基本語彙といい、通常1,500語ないし3,000語くらいが考えられている。いかなる言語においても、音韻・文法が体系をなしているのに反して、語彙にはこのような体系性は認めがたい。しかし語彙を構成する個々の単語は互いに他と無関係な状態にあるのではない。ある単語の形、意義、文法的機能などが変化をすると、その変化が語彙全体に影響をおよぼすことはなくても、変化した語と深い関係にある単語はその変化の影響をうけることがある。

〔語彙の変化〕語彙の変化には種々の原因が考えられる。音韻変化は必然的に単語の形を変える。その結果二つの語の形が等しくなると同音語となり、意味の伝達に支障を生ずると、一方が用いられなくなって別の語がそのかわりに用いられる。あるいはある語の意義変化のために、もとの意義を別の語で表わしたり、新しく語を生ぜしめたりすることがある。他言語からの借用や、それまでなかった概念・事物が新しく命名されたりすると、それらの語と関係ある語が影響を受けて変化することがある。また、類推によって単語の形を変えたり、新しい語を生じたりする。社会的な考慮や、宗教的原因、表現効果などのためにある語のかわりに別の語を用いたりする。そのほかにも種種の原因が考えられるが、これらの結果、語彙も音韻・文法が変化するように時とともに変化していく。語彙は音韻・文法に比して比較的容易に他言語から借用される。ゆえに音韻・文法を考慮に入れな

いで語彙の異同のみによって言語間の親族関係を論ずることはできない。

近年アメリカの言語学者スワデシュ M. Swadesh によって、借用されることの少ない一般的な基礎語彙の変化を統計学的に研究することがなされてきた。すなわち、いかなる言語においても基礎語彙はほぼ一定の速度で変化するという考えにもとづいて、基礎語彙のうち、祖語からの残存語の百分率によって同系諸言語が祖語から分れ出た年代を算定しようとするのである。この方法を〈言語年代学〉あるいは〈語彙統計学〉という。いまでも、言語の比較研究は主として音韻・文法に重点が置かれていたが、この方法は語彙によって比較研究をなそうとするものである。

〔語彙の量〕個人でも言語集団においても、語彙の量を計算することは困難である。ある個人が使用する単語の数は、その人が聞いて了解する単語より数がずっと少ないのが普通である。ある言語集団で使用されるすべての単語を集めることは不可能に近いし、類推によって新しい単語がたえず造られている。未開人は数百の単語を有するにすぎないというようなことはまったく根拠がない。おとなは少なくとも20,000語ないし30,000語を使用するといわれている。英語を話す大学生について調査したところによれば、了解する単語の数は大多数の学生において60,000語よりわずかに少ない程度であると報告されている。語彙の豊富な言語を、すぐれた言語、あるいは進歩した言語などと表現するのは適当ではない。同一の内容をいくつかの単語を用いてどのように表現するかはその言語の構造によって変わってくる。微細な意味の差や、ニュアンスの違いを表現しわけらるかどうかは、語彙よりもむしろその言語の話し手たちの思考習慣、言語習慣に関係することであろう。(大竹 敏雄)

ゴイニア Goiânia ブラジル中央部にあるゴイアス Goiás 州の主都で、ブラジル高原南部の農業・牧畜の中心地。人口600,000(1978推定)。標高約750mの高地にある健康地で、1933年以来都市計画が進められ、37年には州都となった。1940～50年で人口は2倍に増加し、さらに50～60年(約13万)には3倍、その後も著しくふえている。北東約65kmにある州の商業中心地アナポリス Anápolis とは道路や鉄道で、他の地域とは航空路で結ばれ、文化の中心地で州立大学がある。

(山崎 禎一)

ゴイエン Jan van Goyen 1596～1657 ヴェン・ホーイエンともいう。オランダの風景画家。ライデンに生まれ、ハーグに没した。その作風はエサイアス・ヴェン・デ・ヴェルデ Esaias van de Velde とサロモン・ロイスダール Salomon Ruysdael の中間にあり、1621年の作品(ベルリン)、23年の作品(ブラウンシュヴァイク)、25年の作品(ブレーメン)等の初期のものには、エサイアスの感化が強く認められる。中期の作品で1631年の〈海浜風景〉(コッタ)、33年の〈井戸〉(ドレスデン)などは光は不十分ながら色調は灰かっ色となり、よく融合している。40年の〈海景〉(ミュンヘン)、〈夏〉(ドレ

ゴイエン 〈ハールレムの海〉 1656



スデン)などから独自の風景画様式をつくった。すなわち霧と光とを巧みに用いて、暖かな灰かっ色の色調によって、17世紀の風景画の代表者となった。43年の〈冬〉をはじめルーヴル所蔵の作品(1644～45)は彼の秀作である。(三輪 福松)

こいかわはるまち 恋川春町 1744～89 江戸時代の黄表紙作者。駿河(静岡県)小島藩士で、本名は倉橋格。筆名は江戸小石川春日町に住んだのにちなむ。はじめ浮世絵を習いさし絵などをかいたが、1775年(安永4)自画自作の《金々先生栄花夢(きんきんせんせいえいがのゆめ)》を出した。子ども向きの絵本の形式で現代世相人情風刺をこころみたのが大歓迎をうけたので多くの追随作を生み、〈黄表紙〉という新ジャンルがひらかれた。安永中になお《三升増鱈鱈(みすますうろこのはじまり)》《辞闘戦新根(ことばたかいあたらしいのね)》《三幅対紫曾我(さんぶくつひむらさきそが)》《楠無益委記(くすのきむだいき)》などの佳作があるが、1789年(寛政1)にいわる寛政新政下の世相を笑いの材料とした《鸚鵡返文武二道(おうむがえしぶんぶのふたみち)》(1789)を出し記録的な成功をおさめた。当局はこの作を新政批判と解して春町を召喚しようとし、春町は病と称してゆかず、自決したと伝えられる。小藩の藩士であった彼は当局と藩の間で板ばさみになったと想像される。作者として構想はやや粗雑ながら天才的な着想と、するどい着眼にすぐれ、自画自作の完全な調和とあいまって黄表紙という超現実の遊戯文学世界を展開し、その異才を発揮した。→金々先生栄花夢

(浜田 義一郎)

こいぎょう 呉偉業 1609～71 中国、明末清初の詩人。字(あきな)は駿公。号は梅村。江蘇太倉の人。明の崇禎4年(1631)の進士、翰林院編修、東宮侍読、南京國士監司業などを歴任し、明がほろびて後は福王につかえたが、権臣と対立してやめた。清の世となり、ついに仕進を断念したが、当路者に要請されて出仕し、秘書院侍講(政府の文書・記録をつかさどる職)となり、国子監祭酒(国立大学長)になった。のちに母の死にあって帰郷し、康熙(こうし)10年に死んだ。彼は清朝に仕えたことをつねに後悔し、〈我本淮王旧鷄犬、不随仙去落人間〉などの詩がある。臨終に遺言して〈僧服におさめ、一円石を樹て、詩人呉梅村之墓と題すれば、それで足りる〉といった。その詩詞は技巧的で美しく、少年時代の作はきらびやかな才華と風流に富んでいたが、戦乱興亡の経験後は悲壮ではげしい詩風にかわり、晩年には庚信(けいしん)の寂風に近かった。錢謙益、龔鼎孳(きょうていし)とともに江左の三大詩人といわれ、書・画にもすぐれていた。《梅村集》40巻がある。晩年に作った伝奇《秣陵春》および雜劇《通天台》《臨春閣》は最も傷心の調に富むという。(毛塚 栄五郎)

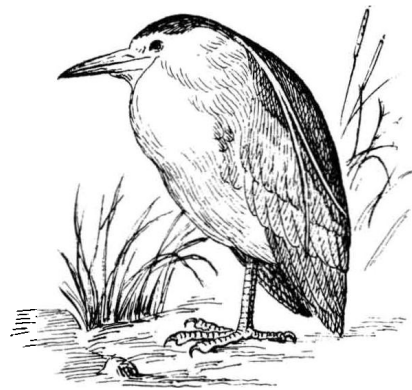
こいきん 顧維鈞 Ku Wei-chün 1888～ 台湾の国民党政府の外交官畑の政治家。江蘇省の人。欧米ではウェリントン・クーWellington Kooの名で知られている。清末、民国の外交官唐紹儀の

女婿であったが、1918年の末に妻と死別した。アメリカに学び、帰国後外交界に入り、北京政府の、とくに外交面で重要な役割を果たした。すなわち外交総長、國務總理、各国の公使、パリ講和会議、ワシントン会議、関税会議の各中国全權代表などの要職を歴任し、1931年張学良の勢力を代表して国民政府に参加し、外交部長に任ぜられた。その後リットン調査団に随行し、駐仏公使、國際連盟中国代表などに任じ、國際舞台で日本とわたりあった。36年駐仏大使に昇任し、ついで駐英大使になり、その間サンフランシスコ会議中国代表をつとめ、46年駐米大使に転じた。56年国民党政府總統府資政になった。また、57～67年ハーグの國際司法裁判所判事をつとめ、現在はアメリカにいる。(藤井 正夫)

こいさぎ *Nycticorax nycticorax* 夜クァークァーとカラスに似た声で鳴きながら飛ぶ中形の鳥。コウサギ目サギ科。翼長26～29cm、頭頂から背までは黒緑、翼、腰、尾は灰色、体の下面は白、くびの上部に2、3枚の細長い白羽がある。幼鳥は背面かっ色の地に汚白色の斑紋があり、星五位(ほしごい)と俗称されるが、3歳で成羽となる。ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカに広く分布し、日本では本州、四国、九州で繁殖、普通留鳥であるが、ときに近距離の渡りをする。昼はスギ、マツなどの林に群れて眠り、夕方から朝まで、水田、湖沼などに出かけて魚、エビ、カニ、カエル、タニシ、こん虫などを捕食する。巣は樹上に枝、枯草などでさら形につくり、4～8月に青緑色の卵を3～6個産む。ゴイサギに似ていてそれより小さく翼長24～27cm、上面クリ色のミゾゴイ *Gorsakius goisagi* は夏鳥で、4、5月の夜ウォーフ、ウォーフとうなるように鳴く。日本、中国東部で繁殖し、冬は台湾、フィリピンなどに渡る。

(今泉 吉典)

こいしあそび 碁石遊 碁石を使って行う遊戯。日本では室町時代以前から〈盗人かくし〉〈左々立(ささだて)〉〈島立〉〈十不足〉〈百五減〉〈まま子立て〉などの碁石によるパズル遊びが、中国から伝来して行われた。〈盗人かくし〉右下図のaのように、16個の石を縦横それぞれ7個になるようにならべたところに、8個の石を加え、しかも図のbのように縦横7個の数は変わらぬようにする遊びである。〈盗人かくし〉の名は、柳亭種彦によると、追加する8個の石を盗人に見立て、それが見張番所にかくれこむことに由来するという。〔まま子立て〕図のcのように黒白15ずつの石をならべ×印の石から左へ白石ををさぞえて10番目のものを順次ぬいていくと、△印の白が残り、この石から逆まわりに10番目の黒石をぬくと最後にやはり△印の白石が残る。いつも同じ石が残るので、〈まま子立て〉の名があり、近世になると碁盤上で遊ばれたが、〈徒然草(つれづれぐさ)〉では双六盤(すごろくばん)で遊んだとされ、この遊びを運命の無常にたとえている。そのほかく(く)〔まんじ〕ひろい〕〈矢ひろい〉〈三つ星取り〉なども同種のパズル遊びとして遊ばれているが、欧米でもこれに似た遊びが多く行われており、なか



ゴイサギ

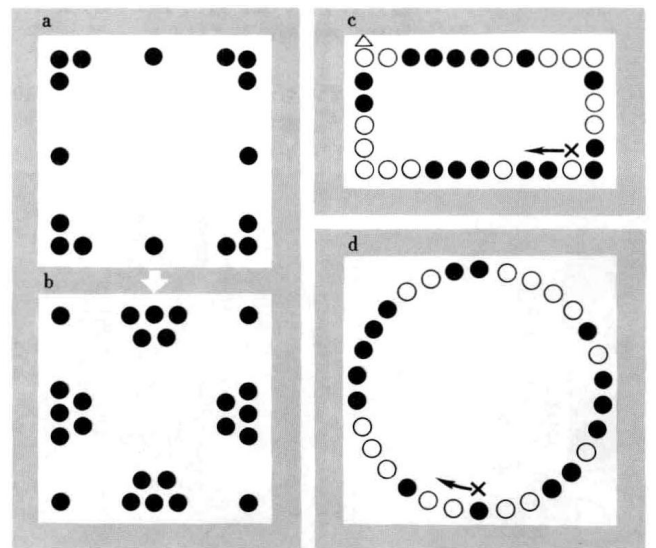
でもく(く)の黒白〕the black and white puzzleが著名である。これは白人と黒人15人ずつの乗組員の舟が難破し、船長は人員制限のため乗組員を円形にならべ、左のほうに回って10人目の男を順次海中に投げ15人を残したところ、すべて白人が残ったという遊びである。船長のならば図のdのようであった。なおパズル遊びではないが、指に碁石を押しつけて多くとるのをくらべる〈乱碁(らんご)〉や碁石のおはじきも平安時代から行われていた。後者は〈弾碁(たまご)〉の遊びの簡易化されたものであろう。

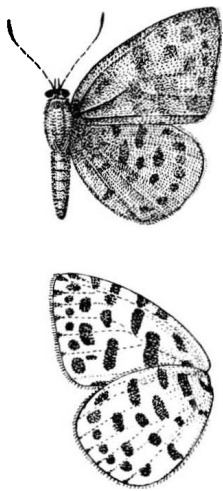
(小高 吉三郎)

こいしかわ 小石川 東京都内の旧区名で、1947年本郷区と合併して文京区をつくり、その西半部を占めている。現在の小石川1～5丁目白山通と春日通の間の南部を占め、北部地域には印刷・製本の工場が集まり、ほぼ中央部に伝通院がある。→文京〔区〕 (木内 信蔵)

こいしかわしよくぶつえん 小石川植物園 正しくは東京大学理学部附属植物園といい、東京都文京区白山3丁目にある。面積158,000㎡。沿革は遠く1684年(貞享1)にさかのぼり、小石川御薬園と称する幕府の薬草園の一部であった。以来幾度遷をへて大学の所属となるや1871年(明治4)小石川植物園と改称、さらに大学の名称改変とともに数次名称を変更して第二次世界大戦以後は現在の称呼となった。1945年(昭和20)の空襲で設備や機能の大半を破壊されたが、こんにちでは復興し、破壊の跡はまったく見られない。内外の植物数千種を栽培して東京大学の職員学生の研究用に供するほか、広

碁石遊び 3例





ゴイシシジミ(♂) 下は裏面

く一般に公開して植物学の普及につとめている。栽培植物中、最もいちじるしいものは1896年に精虫の発見された歴史的記念物のイチョウである。なお、日光市の植物園はこの分園である。

(本田 正次)

こいししじみ *Taraka hamada* 鱗し(翅)目シジミチョウ科に属する小形のチョウ。表面は一様に黒色、裏面は白色で黒紋を散在する。和名はこの裏面の黒紋に由来する。北海道から九州にいたる各地に産するが、分布は局地的で、タケまたはササやぶに群生することがある。海外では朝鮮、中国本上および台湾、ビルマ、インド、タイ、スマトラ、ジャワなどに広く分布し、前ばねの表面に白斑のあるものもある。5～9月に数回発生する。幼虫は肉食性で、ササやタケ類につくアブラムシ(蚜虫)類を食べ、植物質を食べない。幼虫で越冬する。幼虫が完全に肉食性のチョウは世界でも類が少なく、アフリカ、アメリカなどにやはりアブラムシ類またはヨコバイ類の幼虫を食べる同じシジミチョウ科の種類が数種類知られているだけである。ゴマシジミ *Maculinea euphemus*、オオゴマシジミ *M. arionides*、クロシジミ *Niphandia fusca* などの幼虫も、ある時期にアリの巣中に入りその幼虫を食べるが、完全な肉食性ではなく、若齢期にそれぞれ特定の植物を食べるので、生態から、また分類上から見ても、このゴイシシジミとはかなり縁の遠いものである。(黒沢 良彦)

こいずみ 小泉 ⇨大泉(おういずみ) [町]

こいずみさくたろう 小泉策太郎 1872～1937 政治家。三申(さんしん)と号した。静岡県に生まれ、東京に出て法政経済を学んだのち新聞界に入り、〈静岡新報〉記者となり、ついで〈自由新聞〉に転じ、幸徳秋水と親交を結んだ。のち〈めざまし新聞〉を経て〈九州新聞〉社長となり、1903年(明治36)ふたたび上京して〈経済新聞〉を発行し、株式で巨利を得てから実業界に活躍した。12年以来、静岡から衆議院議員に当選すること7回、政友会の重鎮となった。28年(昭和3)田中義一内閣への久原房之助の入閣に反対し、破れて同党を脱し無所属となり、以後政界を退いた。詩文をよくし、〈懐往時談〉その他の著書がある。

(藤井 松一)

こいずみちかし 古泉千樫 1886～1927 歌人。本名幾太郎。淮南荘主人、怪老人の別号がある。千葉県に生まれた。

小学校教員の職を辞して上京、帝国水難救済会に勤務のかたわら作歌し、〈馬酔木(あしび)〉いらい賞揚してくれた伊藤左千夫の門にはいり、1908年(明治41)〈アララギ〉創刊に加わり、のち左千夫の編集をたすけた。晩年にはこれを離れ〈日光〉の発刊に加わり、また〈青垣会〉を結成した。連作が多く晩年の病中吟は清澄で寂寥(せきりょう)の情切々たるものがある。生前の自選歌集〈川のほとり〉(1925)のほか、没後〈屋上の土〉(1928)、〈青牛集〉(1933)の歌集がある。

(長谷川 泉)

こいずみまたじろう 小泉又次郎 1865～1951 政治家。小泉田兵衛の次男として、武蔵(神奈川県)に生まれた。貧困のため独学し、検定をうけて小学校教師となり、新聞記者もしたが、のち政界に入り、横須賀市会議員、神奈川県会議員を経て、1908年(明治41)以後神奈川県第2区から出馬して衆議院議員に当選すること12回に及ぶ。憲政会のち民政党に属して、19年(大正8)選挙法改正案上程にきいし、普選期成同盟などの労働者・学生団体とも提携し普選運動の先頭に立ち、普選実現までこれに尽力した。29年(昭和4)浜口雄幸内閣、31年(昭和6)第2次若槻内閣で通信大臣、42年翼賛政治会評議員となり、第二次世界大戦後追放指定をうけた。著書に〈普選運動秘史〉がある。

(原田 勝正)

こいずみやくも 小泉八雲 ⇨ハー

ゴイセン Geusen ギューGeuxともいう。〈こじき〉の意味で、1566年スペインの暴政に反抗して団結したネーデルラント人の同盟をさす。スペイン王フェリペ2世はトリエント公会議の決定を実行すべく、ネーデルラントで宗教裁判を行い、住民を迫害したが、これはネーデルラント古来の自由を制限し侵すものとして住民の反感をかった。ナッサウ伯ルードヴィヒやブレードローデ伯ヘンドリックが中心となって同盟を結成し、トリエント公会議の決定の強制に反対した。1566年4月5日彼らはブリュッセルにおいて総督パルマ女公マルゲリータに請願をなしたが、このとき廷臣バルレーモンが女公に〈たかがゴイセン(こじき)の群にすぎません〉といったことからこの名がはじまり、以後ゴイセンはネーデルラント愛国者の名称となった。フェリペ2世は彼らを徹底的に弾圧すべく、1567年アルバ公をおくって猛烈な恐怖政治を行わせ、ついにゴイセンも終息せざるをえなくなった。一方国外へのがれたネーデルラント人はゼー・ゴイセン Zee Geusen (海のこじき団)を組織し、オランジェ公ウィレムの特許状を得て、スペイン船その他をおそい、海上で活躍した。⇨オランダ独立戦争

(大野 真弓)

こいそくにあき 小磯国昭 1880～1950 陸軍軍人、政治家。栃木県生まれ。1901年(明治34)陸軍士官学校、10年陸軍大学校を卒業、参謀本部や陸軍省の要職を歴任、部内における宇垣一成の直系と目されていたが、宇垣の退役後は必ずしも宇垣閥に属さなくなった。1931年(昭和6)陸軍次官、翌年関東軍参謀長となり、さらに師団長を経て朝鮮軍司令官、38年

大将で予備役となった。在職中から政界への関心が強かったが、退職の翌39年には平沼騏一郎内閣の拓務大臣、40年にも米内光政内閣の拓務大臣となった。第二次世界大戦の末期、戦局の不振と国内矛盾の激化とから東条英機内閣が倒れると、彼は米内と共同で組閣を命ぜられ、1944年7月首相として小磯内閣を組織した。しかし軍部に対する統制力も国内各層に対する政治力もなく、戦争指導についてなんら決定的な手を打つことができず、破局へ引きずられながら9ヵ月の在任ののち、45年4月辞職した。戦後A級戦犯として東京裁判で終身刑に処せられ、巣鴨刑務所で服役中病死した。(藤原 彰)

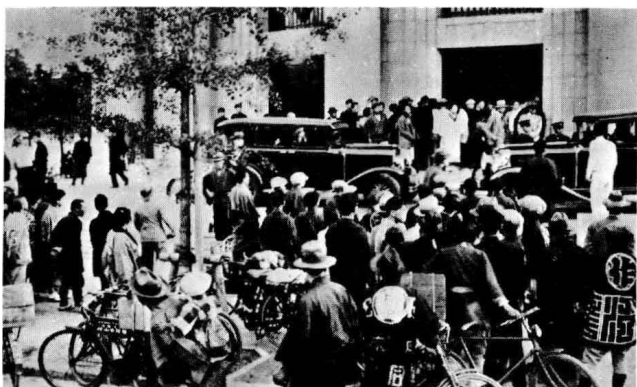
ごいちごじけん 五・一五事件 1932年(昭和7)5月15日、海軍青年将校らが犬養毅首相を暗殺し、クーデタをくわでた事件で、直前の〈血盟団事件〉とつながりが深い。

1930年ころから海軍青年将校の間に、藤井齊(事件の直前上海で戦死)を中心とする国家主義的改革をめざすグループが生まれた。彼らは井上日召ら民間の国家主義者と交わり、直接行動によって国家改造のきっかけをつくろうと画策していた。32年春血盟団事件が失敗したので、いよいよ実行を決意し、茨城県に愛郷塾を主宰していた農本主義者橋孝三郎と結び、また31年の〈十月事件〉失敗後一時クーデタ計画を延期していた陸軍側から、陸軍士官学校生徒のグループを誘い、大川周明らから資金的援助を受けてクーデタをくわでた。その計画は、陸海軍人の一団が首相官邸はじめ東京市内の要所を襲撃し、橋の影響下にある農村青年が組織する農民決死隊がその夜東京市周辺の変電所をおそい、東京市内を混乱におとしめて戒厳令の施行をまねき、大川らの外部工作によって改造政権をたてるというものであった。計画にしたがって5月15日午後、古賀清志、三上卓ら海軍将校6名と、陸軍士官学校生徒12名が3組に分れ、その1組は首相官邸をおそって犬養首相を射殺したが、牧野内大臣宅、警視庁、政友会本部、日本銀行などをおそった他の組は、大した被害をあたえることができず、いずれも憲兵隊に自首した。ついで同夜農民決死隊の青年が1～2名ずつに分れて各変電所を襲撃したが、科学知識に欠けていたため全然効果をあげえず、全員逮捕された。

犬養内閣がこの事件によって倒れたあと、斎藤実内閣が挙国一致内閣と称して生まれたが、犬養内閣がついに最後の政党内閣となった。軍部は事件を政治的進出の武器として利用し、事件の裁判でも被告の動機の純粋さを賞賛した。裁判は翌年まで、陸・海・民の3者に分けて行われたが、刑はいずれも比較的軽く、恩赦などもあって数年で全員が出獄した。

この事件は、1931年の〈三月事件〉〈十月事件〉、あるいは36年の〈二・二六事件〉と比べると計画の規模も小さく、計画自体もきわめて粗雑で、直接行動ののちのプランはほとんど皆無にひしりかっ

五・一五事件 襲撃された警視庁前に集まった群衆



31)後の革新的な風潮の中でおこったことなどによって、社会にあたえたショックは大きく、血盟団事件とともに日本のファシズム運動史上に特異な地位を占めている。事件の参加者には貧窮農民の子弟が多く、軍人の参加者も農村出身者が多かった。あたかも農業恐慌のさなかで農民の不満が大きかったこの時期、橘や井上らの農本主義的イデオロギーが彼らをつかむことはやすかったのである。それだけにその他の事件に比べるとファッション的色彩が弱く、上層部とのつながりも比較的少なかった。(藤原 彰)

こいちじょういん 小一条院 994~1051 三条天皇の皇子。敦明(あつあきら)親王という。母は藤原済時のむすめである皇后娥子。1011年(寛弘8)親王宣下(せんげ)をうけ、一品(いっぴん)に叙せられ、式部卿に任ぜられた。16年(長和5年1月)三条天皇が譲位し、後一条天皇が立つにさいし、藤原道長は自分のむすめ彰子の生んだ敦良親王(一条天皇の皇子)を皇太子に擁立しようとしたが、三条天皇はこれを許さず、敦明親王を皇太子とした。このため道長は、皇太子の守刀にすることを例とした「壺切(つぼきり)の剣」を敦明親王にさげす、陰に陽に圧迫を加えたため、皇太子の地位ははじめから不安であった。しかも17年(寛仁1年5月)三条法皇が没した後は、有力な補佐の臣もなく、公卿(くぎょう)などはみな道長をはばかり、御殿に伺候する者もなくなったので、同年8月ついに敦明親王は皇太子を辞した。道長は大いによこび、ただちに敦良親王を皇太子に立て、敦明親王には小一条院の院号を奉って、待遇・供給をすべて太上(だじょう)天皇に准じた。天皇が位につかずに院号をうけ、太上天皇に准ぜられることはこの時にはじまる。この事件は道長が外戚の権勢をうるためにおこなった非常手段であるが、道長は皇太子廃位の目的を達した後は、手の裏をかえしたように態度を改め、そのむすめ寛子を小一条院の妃として、その歓心をうるようにつとめた。(貫 達人)

こいちや 濃茶 抹茶(まっちゃ)の一種で、薄茶(うすちゃ)に対する。覆下(おおいした)園(日おいをした茶園)の老樹の若芽から製する。また茶道における濃茶点前(てまえ)をさす。すなわち何人分かを同時に1わんにたて、これを飲み回すもの。しかし、ときには各服点(かくふくだて)といい、1人分ずつたてることもある。たて方も濃い目に練るようにし、あわは立てない。総て用いられる道具組は重く、茶はふつう茶入れに入れてさらに袋をかけて用いられる。→抹茶 →点前 (小田 栄一)

こいつそうしょ 古逸叢書 林述斎の編集した《佚存叢書(いつぞんそうしょ)》にならい、中国では失われ日本に伝存する漢籍を集めた叢書。1880年(明治13)清国の駐日公使館員として来日した楊守敬が、当時の駐日公使黎庶昌(れいしよしょう)にすすめて編集したもの。影宋蜀大字本の《爾雅》以下すべて26種の書をおさめ、全部で200巻ある。1882~84年にわたって、日本の東京で刊刻された。《佚存叢書》は本文を活字に改めて印行したが、

この《古逸叢書》は、原本のとおり、刊本と写本とををわず、みなそのままの姿に影刻した。この点、《佚存叢書》よりも進歩していて、学術的価値が高く、いまなお学界に珍重されている。なお1923年以来、上海の商務印書館では《続古逸叢書》を印行したが、これは中国に伝えられた宋・元時代の古版本を主としていて、《古逸叢書》とは多少性質がちがっている。→佚存叢書 (神田 喜一郎)

こいで 小出[町] 新潟県中部、北魚沼郡の町。1954年に伊米ヶ崎村を編入。人口13,076(1970調)。縦谷の魚野川と横谷の佐梨、破間(あぶるま)の3川の合流点に発達した谷口集落で、上越線と只見線との、また国道17号線と南会津、尾瀬沼に通じる2国道の分岐点にあたる。寛永年間(1624~44)、上田銀山の発見により開発されたこの町は、現在、奥只見電源開発の拠点としてふたび繁栄し、魚野川のアユ釣、変化に富むスキー場など、観光地としても知られつつある。ほかに県営ニジマス養殖場、円福寺などがある。(磯部 利貞)

こいでいちじゅうろう 湖出市十郎 江戸時代の長唄(ながうた)の唄方(うたかた)。【初世】?~1800 明和(1764~72)ころの江戸に現われたが、上方の湖出金四郎の門弟と思われる。めりやすを得意とし、《黒髪》《白妙》《種時三番(なねまきさんぱ)》などを初演した。天明(1781~89)期に大阪に出、江戸長唄をひろめたが、地唄の《黒髪》はそのときもっていった曲が上方に採用されたと思われる。江戸へ帰っては地唄を普及した。【2世】?~1803 初世の門弟で、初め湖出文治といった。《木賊苅(ときざかり)》を初演した。(渥美 清太郎)

こいでならしげ 小出橋重 1887~1931 洋画家。大阪市南区長堀橋筋問屋街の薬商の家に生まれ、1907年(明治40)東京美術学校日本画科に入学、3年目に同洋画科に転じ、14年(大正3)卒業。はじめ院展洋画部に出品したが、第6回二科展で《Nの家族》が犒牛(ちやぎゅう)賞となり、第7回同展に《お梅の像》その他を出して二科賞を受けた。1921~22年ヨーロッパに滞在し、23年二科会会員になった。後期は兵庫県蘆屋に住み、大阪信濃橋洋画研究所を設けて関西洋画壇のために力をつくした。小出の画業は北歐ルネサンスの写実主義とセザンヌ風をとりいれて、時流の印象派風を突きぬけるところから出発し、やがて明快なデッサンと鋭い感覚をはらむ独自の近代的様式を樹立した。とくに数多くの裸婦には作者のねばりある異才が鮮烈に発揮されており、風景、静物にも秀作が多い。おもな作品は前記のほか、《帽子のある静物》《帽子をかぶれる自画像》《支那寝台の裸女》《ソファの裸女》など。(河北 倫明)

こいと 小糸 千葉県君津郡の旧町名。1970年君津町へ編入(君津町は71年9月市制)。木更津市の南にあり、房総丘陵が町域の大部分を占めるが、林業は振わず、住民の大多数は複雑な地形をなす小糸川沿岸の段丘上で、上総(かずさ)掘という

特殊な井戸掘技術の発祥地で、古来水路の整備に心がけ、米作に力をいれてきた。畑が狭く、めだった商業的畑作物は少ない。(白浜 兵三)

こいとがわ 小糸川 千葉県、房総半島房総丘陵に源を発し、北西流して東京湾にそそぐ川。全長52km、流域面積138km²、流域の地質は上流から下流へ三浦層群に属する豊岡・関・秋元の各層群および成田層群(佐貫層)からなり、北西に傾く単斜構造をなし、その中を刻んだ必従谷が小糸川である。中流以上には数段の段丘が発達し、ところどころ穿入曲流をしている。1955年上流に三島ダムが建設され、工業用水として利用されている。

(市川 正巳)

こいぬ 小犬 星座の名。おおいぬ座の北東に位置し冬の夜空を飾る小星座。主星プロキオン Procyon は1等星で、白色わい星の伴星をもっている。β星はゴマイザという3等星。午後9時南中は3月中旬、概略位置は赤経7h 30m、赤緯+6°。(石田 五郎)

コイネー Koine ギリシア語で〈共通語〉を意味し、およそ前3世紀以後とくに紀元5世紀ころまで用いられたギリシア共通語をさす。古典時代のギリシア語は多くの方言に分れていたが、アテナイが政治、文化の面で優越していたために、その言語であるアッティカ方言がギリシアにおける一種の共通語となっていた。さらにマケドニアの王朝もこれを公用語として採用し、ますます勢力を得たアッティカ方言が他の方言をしだいに消滅させるにいたった。このアッティカ方言を主として、これに他方言、とくにイオニア方言の要素を加えてできたギリシアの共通語がコイネーである。コイネーはアレクサンドロス大王の東征によってその範囲が大きくなり、ついにはエーゲ海、マケドニア、トラキア、黒海沿岸、小アジアからインドにいたる地、エジプト、アラビアなどの広大な地域の共通語となった。ローマ時代にはいつてからもラテン語とともに用いられ、ローマ帝国の東西分裂以後はビザンティン帝国の公用語となった。なお《新約聖書》(1世紀後半)の書かれたギリシア語は本質的にはコイネーであるが、とくに《新約聖書ギリシア語》といわれる。これは《旧約

小出橋重《支那寝台の裸女》1929

